

—平成27年度 廿日市市地域力向上助成事業—

郷土史 地御前ものがたり



地御前郷土文化保存事業

—平成27年度 廿日市市地域力向上助成事業—

郷土史 地御前ものがたり

地御前郷土文化保存事業

はじめに

地御前は、「本土の地にある神の御前」「ヂノゴゼン」と言われ、現在は「ジゴゼン」である。巖島を沖の御前・本宮宮島神社と深い縁にあり、飛鳥時代に佐伯鞍職によって地御前神社が創建された。地御前村は、地御前神社の門前で漁民の集落として発展しました。

現在の地御前地区は、南側には宮島街道・広島電鉄・JR山陽本線。また、地区の中心に西広島バイパス（昭和49年開通）が東西に走っており、地御前地区としては3地区に分かれております。宮島街道南側の地区は、昭和40年代に市街地再開発住宅地として整備され、また地御前港は、瀬戸内海の豊かな恵みを受けた近海漁港として栄え、特に牡蠣養殖は非常に盛んで「牡蠣いかだ」は周辺の風物詩となっています。中の地区は、旧市街地として古くからの街並みが続き、名所・旧跡を持つ機能から歴史文化発信拠点となっています。また、西広島バイパスの北側は、昭和40年～50年代に開発された新興住宅団地として街並みが形成されております。

この地御前は、歴史・文化史跡といった資源は豊かですが、これらを記した郷土史がありません。地域の文化史跡を地元の人が再確認し、共有することで地域が活性化すると考えます。古くから住んでおられる人もだんだんと少なくなり、今これらの文化史跡を書物で伝承すべきであると考え、郷土史作成に至りました。

今回の編集者は専門的知識はなく文章力・表現力もない全くの素人集団でありましたことをご理解いただき一読願えれば幸いです。

編集者一同



地御前神社 (P5~P6)

弥山・嚴島神社・地御前神社
 極楽寺の位置関係補足地図

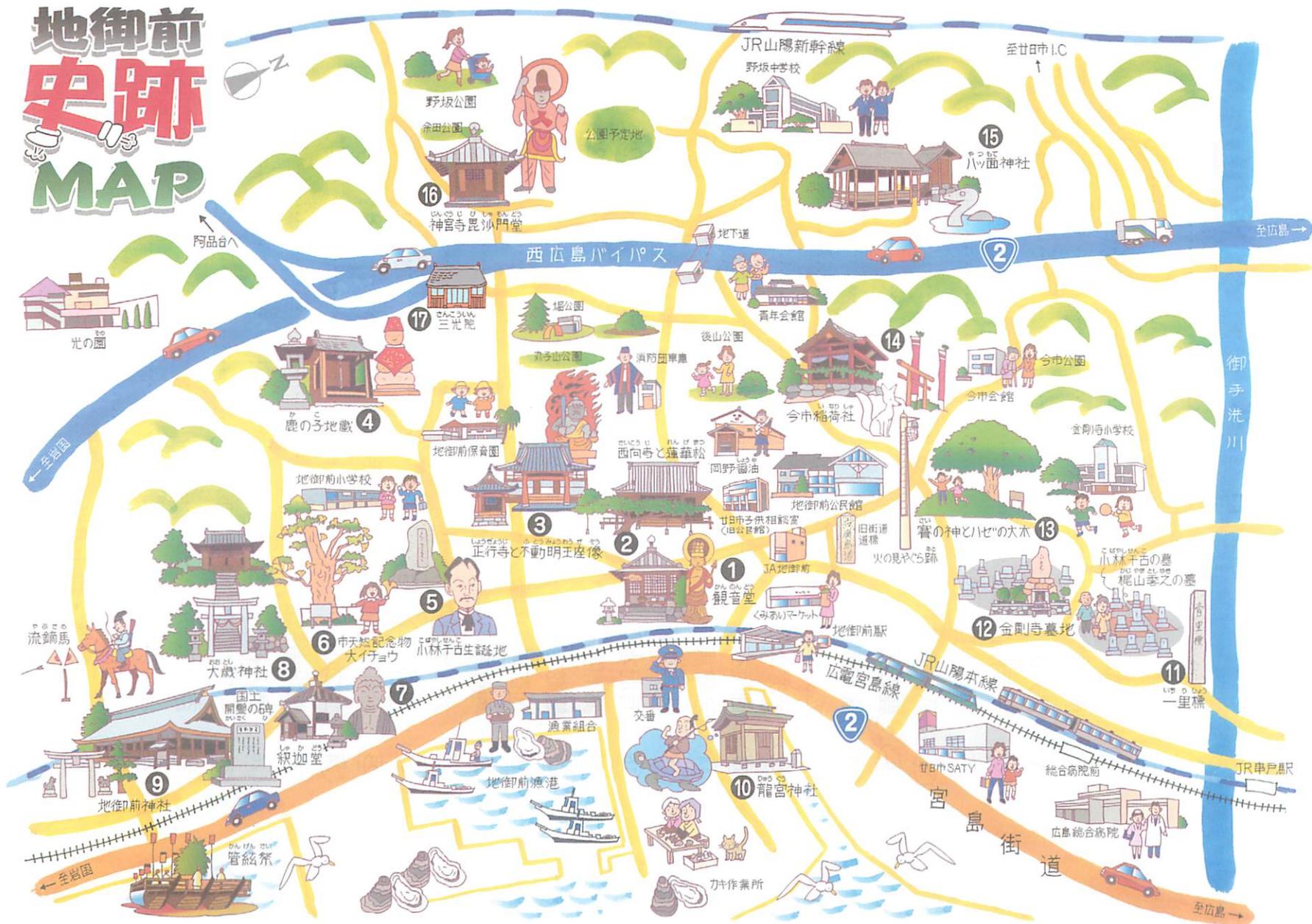
参考文献

宗高尾城跡・丹渡尾城跡
 発掘調査の概要

発行

七尾土地区画整理組合

地御前 史跡 MAP



至岩国
至山陽IC

阿品台へ

至岩国

至山陽IC

野坂公園
余田公園
公園予定地

16 神宮寺毘沙門堂

17 三光院

18 ハツ面神社

19 鹿のうた戯

20 地御前保育園

21 西向寺と蓮華松

22 同野蕎麦

23 地御前公民館

24 菅の神とハゼの大木

25 金剛寺墓地

26 小林千古の墓

27 梶山幸之の墓

28 観音堂

29 市天竺記念物

30 大イチョウ

31 大蔵神社

32 国士

33 開聖の6碑

34 釈迦堂

35 地御前神社

36 菅絃祭

37 漁業組合

38 地御前漁港

39 青龍宮神社

40 宮島街道

41 刀作業所

42 一里塚

43 至山陽IC

JR山陽新幹線
野坂中学校

15

16

17

18

19

20

21

22

23

24

25

26

27

28

29

30

31

32

33

34

35

36

37

38

39

40

41

42

至山陽IC

15

16

17

18

19

20

21

22

23

24

25

26

27

28

29

30

31

32

33

34

35

36

37

38

39

40

41

42

至山陽IC

15

16

17

18

19

20

21

22

23

24

25

26

27

28

29

30

31

32

33

34

35

36

37

38

39

40

41

42

御手洗川

目 次

| | | |
|---|---------------|----|
| ① | 地御前村 | 1 |
| ② | 地御前神社 | 5 |
| ③ | 大歳神社 | 7 |
| ④ | 釈迦堂と如来坐像 | 9 |
| ⑤ | 智秀山観音堂 | 11 |
| ⑥ | 今市稻荷神社 | 12 |
| ⑦ | 神宮寺毘沙門堂 | 13 |
| ⑧ | 八つ面神社 | 15 |
| ⑨ | 鹿の子地藏 | 17 |
| ⑩ | 龍宮神社 | 18 |
| ⑪ | 松見山正行寺 | 19 |
| ⑫ | 智秀山西向寺 | 21 |
| ⑬ | 御陵衣祭 | 23 |
| ⑭ | 流鏝馬神事 | 25 |
| ⑮ | 神馬巡行の儀 | 28 |
| ⑯ | 有府水門（有府の港） | 29 |
| ⑰ | お洲掘り | 30 |
| ⑱ | 管絃祭 | 31 |
| ⑲ | 地御前の町屋 | 33 |
| ⑳ | 地御前小学校の歴史 | 35 |
| ㉑ | 大イチョウ | 37 |
| ㉒ | 地御前公民館 | 38 |
| ㉓ | 金剛寺・御衣尾山・御手洗川 | 39 |
| ㉔ | 二つ山 | 40 |
| ㉕ | 戦没者慰霊碑 | 41 |
| ㉖ | 賽の神とハゼの木 | 42 |
| ㉗ | 一里票と国道開墾碑 | 43 |
| ㉘ | 盃状穴 | 45 |
| ㉙ | 地御前村出征記念碑 | 46 |
| ㉚ | 地御前南町遺跡 | 47 |
| ㉛ | 野坂遺跡・桃山遺跡 | 49 |
| ㉜ | 巖島合戦 | 50 |

| | | |
|----|---------------|----|
| ③3 | 三光院 | 55 |
| ③4 | 海軍山 | 57 |
| ③5 | 宮島沖 日米軍の空中戦 | 58 |
| ③6 | 相覧場と火立岩 | 59 |
| ③7 | 山陽鉄道 | 60 |
| ③8 | 広島瓦斯電軌 | 61 |
| ③9 | 地御前海運輸送と旅客船 | 62 |
| ④0 | 明神が浜と海水浴場 | 63 |
| ④1 | 地御前の港と波止場 | 64 |
| ④2 | 地御前の牡蠣養殖 | 65 |
| ④3 | 地御前の漁業 | 66 |
| ④4 | 地御前の盆踊り | 67 |
| ④5 | とんど祭り | 68 |
| ④6 | 秋祭り俵もみ | 69 |
| ④7 | 勝谷酒場 | 71 |
| ④8 | ハワイ移民 | 72 |
| ④9 | J A 広島総合病院の歴史 | 73 |
| ⑤0 | 地御前逡信病院 | 75 |
| ⑤1 | 幻の弾丸列車 | 77 |
| ⑤2 | 扇新開・塩田跡地 | 78 |
| ⑤3 | 「野坂」地名の由来 | 79 |
| ⑤4 | 「阿品」地名の由来 | 80 |
| ⑤5 | 岩鏡神社 | 81 |
| ⑤6 | 教え地蔵 | 82 |
| ⑤7 | 五輪の塔（供養塔） | 83 |
| ⑤8 | お上がり場 | 84 |
| ⑤9 | 小林千古 | 85 |
| ⑥0 | 梶山季之 | 86 |
| ⑥1 | 村上銀行 | 87 |
| ⑥2 | 聖ミカエルの家 | 90 |
| ⑥3 | 野球応援歌（宮島さん） | 95 |



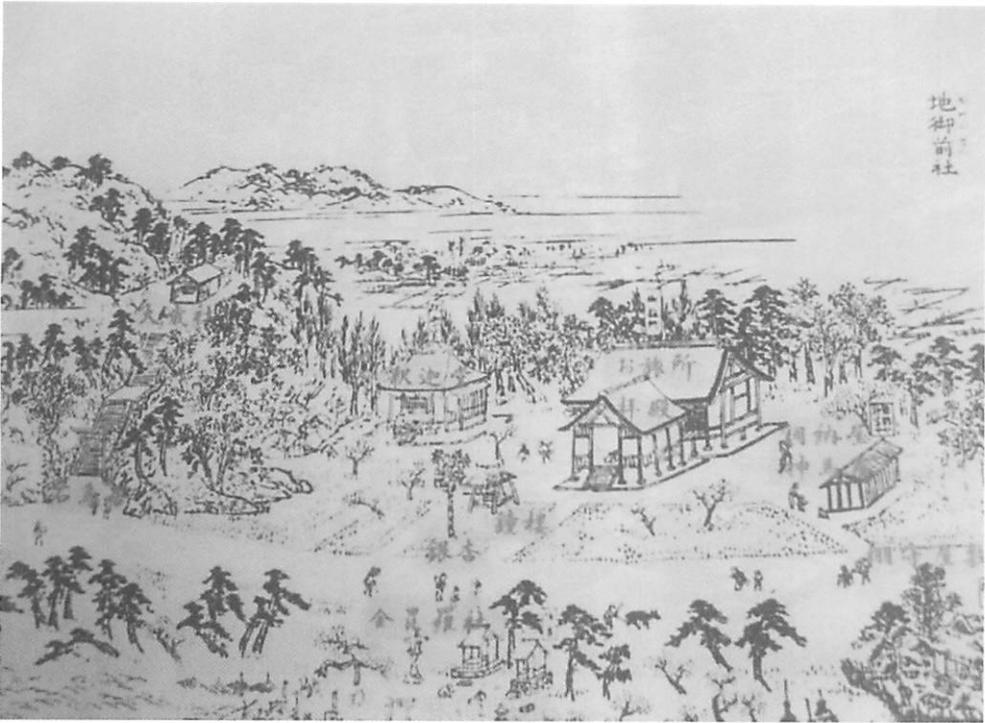
地御前という地名は、現在では「ジゴゼン」というが、元は「ヂノゴゼン」である。巖島神社を内宮、地方の神社を外宮とし、この外宮があるがゆえに「地御前」と呼ぶが、興味があるのは、海岸地方は以前「相ノ浦」と呼ばれていた。昔は「相」という言葉のある海岸地名は、漁場を表す場所が多く、相浦・相浜・相島・相瀬・相崎など「アイ」が付くものが多かった。

地御前は、地の御前「ヂノゴゼン」と言われ、本宮巖島神社と深い縁にあり、飛鳥時代（推古天皇）593年に佐伯鞍職によって地御前神社は造営された。



旧 地御前神社

地御前神社は、明神山を社叢に摂社として堂々たる建造物で、社の周りには大鳥居・釈迦堂・拝殿・お旅所・鐘楼・金毘羅社・住吉社・神馬社などが造営され地御前神社の風情を表していた。又、その近隣には大歳神社をはじめ鹿の子地蔵・神宮社・毘沙門堂・見上寺・八面社・今市稻荷社・観音堂・正行寺・西向寺・龍宮社など神社仏閣が点在していた。



神社 集合絵

地御前村の部落は 40 か所余りの谷あいであり、半農半漁で東西に長く南北に浅い集落で、大きな河川はなく小さな小川が流れ数多くの樋門によって農業を営み、地御前神社の門前で漁民の集落として発展した。弘治元年 (1555) ころには、町屋が 40 数軒建ち並び「きた」「なか」「みなみ」の町名が成立していた。これは、宮島と関係ある町名でその中に、「宿」「掃除屋」など地御前神社に関連するもののほか山城屋・吉野家・むろや・山口屋・廣島屋などの地名や屋号があった。地御前村の拡張は、元禄 7 年 (1694) 扇新開土手に始まり順次拡張された。大土手の最終予定は背戸の川の出口になる予定が漁民の反対により年貢米蔵 (旧公民館) になった。その時代は、観音堂から現農協までが港で、江戸時代には渡廻船で栄えていた。



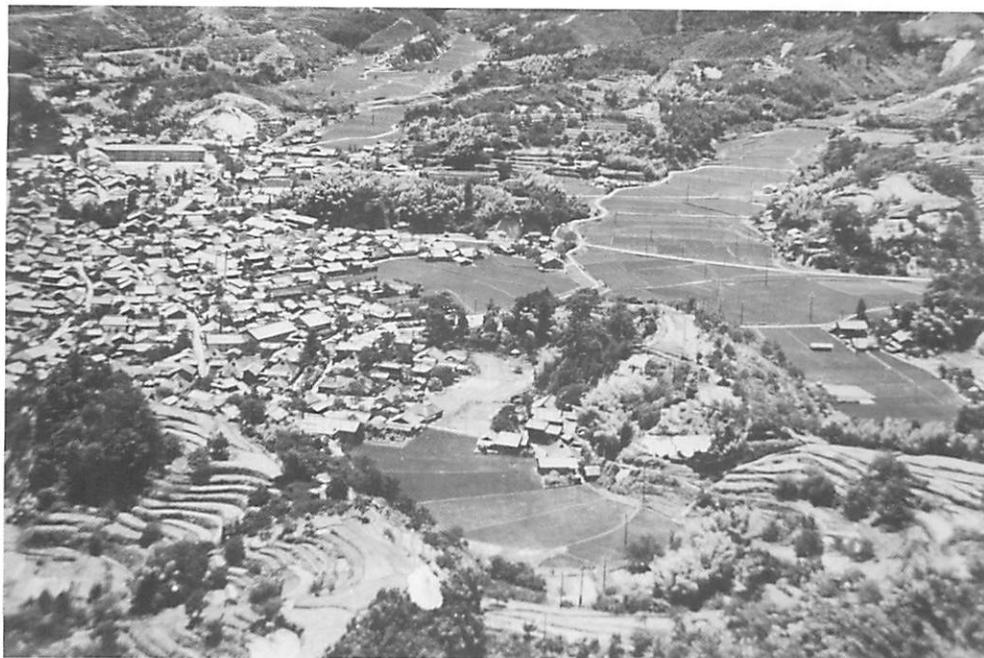
地御前港

教育の場としては、明治6年4月(1873)から明治8年12月まで釈迦堂を教場とした必燐舎が小学校の始まりで開校している。就学児は6歳から13歳児までで、男子72名女子16名が就学していた。

明治10年(1877)地御前に沿岸を走る新国道が整備された。港も村民有志によって造成され、港町周辺が築造されたのは明治41年(1908)である。大正14年(1925)には広電が廿日市から地御前まで開通し、夏には地御前海水浴場駅まで設置された。

明治後期から昭和初期まで、地御前村役場を中心に、酒造り・味噌醤油・魚屋・八百屋・呉服屋・蒲団屋・医院・歯科医院・薬屋・産屋・肉屋・畳屋・煙草・米屋・下駄屋・桶屋・駄菓子屋・豆腐屋・酒屋・化粧品店・文具店等、地御前商店街として何不自由なく生活が出来た。明治31年には、郡内屈指の地主である村上隆太郎の全額出資(資本金三万円)による個人銀行の村上銀行、明治35年には郵便受取所もできた。明治20年から外国移民渡航が始まり、地御前村は、広島県で2番目に多いハワイ移民村である。昭和7年(1932)には観光道路ができ、扇園の道路側には、旭劇場・旭兵器工場・佐伯病院・材木屋・ベニヤ工場・

塩田と幅広く発展をなしていた。半農半魚の地御前村は、特に漁業の盛んな村で、港が埋め立てられ魚市場が出来、近場で取り立ての魚の朝せりの賑わいで活気をおびていた。のちに、鰯網漁・牡蠣養殖が始まり、地御前牡蠣が有名になった。地御前村は、他の地域よりお祭りが多くあり、他村より来客が集まり賑わいのある集落であった。



地御前村

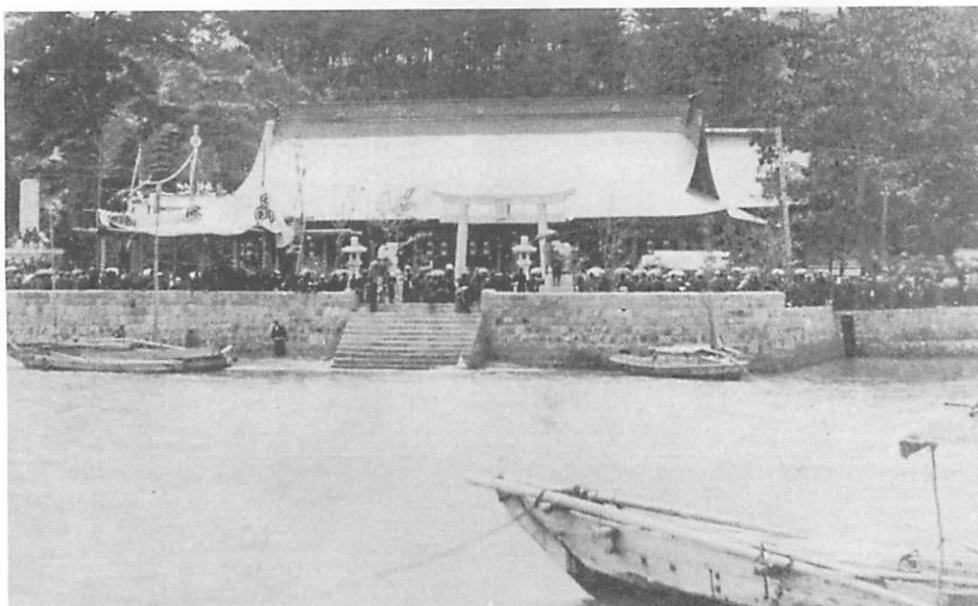
地御前神社

地御前神社は、通称桃山を社叢にして明神が浜を前面に御鎮座されています。かつては巖島神社の外宮であり、現在は巖島神社の摂社である。鎮座も、巖島神社と同じ時期、飛鳥時代（推古天皇）593年に外宮として佐伯鞍職により創建され後に、平清盛の絶大なる支援者、佐伯景弘によってほぼ現在の姿に造営された。

地御前神社には、市杵島姫命の他に、下記の神が祀られている。

| | | | |
|---------|----------------------------------|----------------------------------|---------------------------------|
| 大宮社（本殿） | <small>いちきしまひめのみこと</small> 市杵島姫命 | <small>たぎつひめのみこと</small> 瑞津姫命 | <small>たごりひめのみこと</small> 田心姫命 |
| 客人社（客殿） | <small>あめのおしほみのみこと</small> 天忍穗耳命 | <small>あめのほひのみこと</small> 天穗日命 | <small>あまつひこねのみこと</small> 天津彦根命 |
| | <small>いくつひこねのみこと</small> 活津彦根命 | <small>くまのくすびのみこと</small> 熊野櫛樟日命 | |

地御前神社は、宝暦5年3月(1755)北ノ町の大火により、近隣117軒が焼失し、外宮社再建のため神社横の恵比寿社前で市が開かれ、宝暦10年(1760)再建記念として、舟形手洗いが寄贈された。安政5年(1858)正月6日にも大火により、拝殿・お旅所・お供え所・神馬屋・釈迦堂が焼失し、大正5年(1916)拝殿が再建された。



地御前神社

地御前神社前の鳥居は、仁治元年（1240）明神が浜の御池に木造の大鳥居が建立され、享和元年（1801）に建て替えられている。現在の石鳥居は、明治31年（1898）に建立された。

管絃祭が旧暦6月17日におこなわれ、日本海上三大祭りとして有名で、地御前神社・巖島神社は多くの参拝者で賑わった。また、御座船に御鳳輦（ごほうれん）を乗せ多くの神職が乗るようになったのは、明治14年（1881）3隻の船を繋ぐようになってからで、明治初期までは、御座船は、地御前神社横まで寄せることができた。拝殿の横の丸柱が途中でないのは、管絃船を繋ぐためであるとも考えられる。

柱の下が角ばっているのは柱が腐敗した時取り換えたため、この様になった。

巖島神社・地御前神社・極楽寺の位置関係

弥山の真北の島に内宮（巖島神社）が位置し、その延長上の真北の本土に外宮（地御前神社）がおかれている。そしてまたその真北の山の山頂に極楽寺が位置します。その向こうに北極星が見える。



地御前神社本殿



地御前地域の守り神で、地御前の氏神さんとして高台に鎮座され、詳細は不明であるが地御前神社と変わらない歴史がある。

現在地の前は、田屋地区の奥深い平原（仮称大歳）の地に祀られていた。寂しい谷間に民家も少なく、地御前地区は火災も多く地区を守るためにも町場におろしてくれと、お告げがあったため、江戸時代寛政元年（1789）9月25日に現在の地に鎮座された。氏神様は、各地域の集落の高台に鎮座されており、部落全体を見渡し世の中の景気が良くなれば、祭りも盛り上がり村全体が潤ってくるといわれている。

大歳神社の祭神名は、おおくにたまのみこと 大国魂命である。守り神は、農業から国土経営に協力された神で、大国の御魂といわれる記録が残っている。

現在の社殿は、石鳥居をくぐり石段を登った高台にあり、前側が段差4段の棧敷に築かれているのは、流鏝馬（馬飛ばし）の観覧席で、海岸の砂浜で馬を（流鏝馬）走らせ、沖側に観客が棒で追いやり水際に追いやるほど豊作といわれた。



大歳神社

昭和 26 年 (1951) に社殿の地を 1 段削り落とし、その砂を村上家の蔵のあとに埋め立て、講堂・青年会館が建築された。よって、現在の社殿は、昭和 30 年に再建された。

大歳神社の境内には、桜の木が植えられ 4 月の花見の季節には、地域の方の憩いの場である。

秋祭りには、青年会が神輿を担いで年 1 回の御神幸が行われます。昭和 25 年 (1950) 頃までは、急な石段を登り二つ山の上段で祭典が執行されていたが、現在は、今市稲荷神社で御神幸御旅所祭が執行される。

秋祭りの前日 (ヨゴロと呼ばれています) には御祓い行事として御獅子が、町内を廻ります。

秋祭りは、5 ヲ町村が合併されるまでは、中の九日の 10 月 18・19 日、今では、10 月第 2 土・日曜日に行われている。



大歳神社本殿

釈迦堂と如来坐像

釈迦堂の創建は、明らかではないが如来坐像の大きさからして、地御前神社の付設の寺院の本尊で、如来坐像は神宮寺のものではないかと推定され、寺院の廃寺にともない釈迦堂に移設されたものと思われる。

仁安3年(1168)厳島神社造営の際、外宮(地御前神社)分として、神宮寺・金剛寺等仏教関係のお堂が多く建てられた。元禄10年(1697)には^{みつしばき}厳島道芝記という当時の厳島の観光案内があり、その中にも地御前の絵図があります。当時の建物として、^{おおみやごほうでん}大宮御宝殿・^{へいでん}幣殿、^{まろうどぐうごほうでん}客人宮御宝殿・幣殿、拝殿、鳥居、付属として^{ごくらや}御供屋・御馬屋・庁屋・楽屋・鐘楼、末社として、恵比須社・毘沙門社・読経所・釈迦堂・観音堂があり大宮御宝殿と同格として^{ごしゆくいん}御宿院御宝殿(御旅所)をあげています。



釈迦堂

本尊、釈迦如来坐像は6丈像といわれる仏像で、造りは彫刻の技法からして、室町中期頃の作で貴重な仏像である。坐像高 290 cm 膝張り 230 cmある釈迦如来坐像は、広島県内では例がない大作である。寄木の組み合わせの仏像で、

仏像が大きいいため胸部中央と肩のところ、膝部も胴に寄木にしてある。頭部の蜘蛛髪（チハツ）は切り込み式に表しており、肉髪（ニッケイ）は、やや小さく肉髪相をいれている。額には白豪をはめ、眼は木目作りで半眼に閉じた慈悲深い相で、耳朶（ジダ）は長くて下部は外にかえしている。首は三道を表して首を胴に差し込む方式である。法衣は通肩という着方で、法衣の彫刻は深く流麗である。

釈迦堂は、現在の地御前小学校の敷地内に建物が建立されていて、明治 18 年 (1885) 現在の地に移転された。

明治 6 年 (1873) には、釈迦堂は、必憐舎の名前で教場として開校されていた。広報はつかいち NO548 (昭和 62 年 3 月 15 日) 発刊 参照



釈迦如来座像

智秀山観音堂

智秀山観音堂の開基はさだかではないが、平安時代の地御前神社の絵図にも描かれており、梵鐘には、智秀山観音堂と記されている。

本尊は、十一面観音像で室町時代後期の作で、約 470～480 年前と言われている。観音堂は広島新四国八十八か所の 5 番札所で、地元八十八か所の開基として空海聖人（弘法大師）により開山されたとの伝説から高僧との関係の深いものがあり、最近では、遠方からの参拝者が多くみられるとのこと。

智秀とは、観音山の奥側の山が血臭山と言われたことから、神仏のあいだでは血を見る争い事は避けるため智秀と改められる。伝承によると、宮島には産屋（お産婆）がなく観音堂の周りに産屋が集まるようになったとか。

本堂は、小高い丘に建っていたが樹木が家屋の上や道路側に張り出し危険なため、昭和 56 年に小山を削り平地にして現在の地に安置された。戦時中は小山の下に横穴 U 字型の防空壕があった。

明治時代初期までは、観音山の周りは海で、漁船の船着き場になっていたとか、樹木の岩にとも網がとられていた。



観音さん



智秀山観音堂

観音堂の縁日は、朝観音・夕観音・夕薬師といわれ旧暦の 2 月 1 日であったが、現在は 3 月 1 日正月と、8 月 9 日の四万八千日がある。



今市稲荷神社は、赤い鳥居が目印で今市新開に建立されている。今市稲荷神社は、五穀豊穰と商売繁盛の神様です。開基は定かではないが、国郡誌差出帳には、安永 2 年 (1773) 江戸時代、御桃園天皇の頃、十代将軍徳川家治公の時代と言われている。京都の伏見稲荷大社の分身ともいわれ、祀られている祭神は、うがのみたまのみこと おおたのみこと おおみやひめのみこと倉稲魂命・大田命・大宮姫命の 3 柱。

社殿は、明治 25 年 (1892) と昭和 2 5 年 (1950) の 2 回改築されている。秋祭りの大歳神社の御神幸御旅所祭が執り行われている。戦後、昭和 25 年 (1950) 頃までは、二つ山の急な石段を重たい神輿を担いで上がり難儀をしていた。

今市の地名は、寛永元年 (1624) 以前から馬の市が開かれ、「馬市」が、転訛して今市の地名になった。

今市新開は、正徳 3 年 (1713) に、3 反 7 畝 27 歩が見取り地になっており、明和 6 年 (1769) に至ると畠地 4 反 3 畝 21 歩が交付された。今市神社の下の樋門の石は、今市川の樋門と言われているが？さだかでない。製作は、16 世紀頃の西洋工法で作られた、南蛮樋（南方諸国スペイン・ポルトガル風）である。今市稲荷神社の祭日は、3 月初午の日に近い土曜日か日曜日に行われている。



今市稲荷神社

神宮寺毘沙門堂

神宮寺は、神仏習合の時代に建立された為、神宮寺とつけられた。開基・建立は定かではないが、仁安 3 年 (1168) 平安時代頃、国郡誌差出帳には「往古神宮寺と申す」寺之に有る由と申し伝える記録がある。神宮寺は文禄 3 年 (1594) に廃寺となる。

仏像は、立像で普通の毘沙門天と違うのは、左手に宝塔を握り、右手に宝棒(鉾)を握り、冠の形の帽子をかぶり、着流しの法衣を着て鎧を着用し、台座の上に三面立ちの兜跋毘沙門天である。仏像の高さは 112 cm の一本木彫り作りで、平安時代後期から鎌倉時代初期の作で、廿日市市の重要文化財に指定される。

取得は、昭和 50 年 5 月 15 日。



毘沙門天

毘沙門天は、仏法を護る守護神の一人で、「北」の方向を護る守護神で、四天王の内の「多聞天」と同じで、独尊で「福德と富貴」の天王として信仰され

ており、財宝の神で、七福神の内の一でもある。

毘沙門堂の扉には「ムカデ」の絵が描かれているが、最近では、絵も薄れ見えにくくなっている。地域の人には「ムカデ」の神様と親しまれている。参拝者が、財宝の神様にお金の儲かる方法を教えてくださいとお願いすると、「ムカデ」の足ほど働きなさいとお告げがあったとか。毘沙門堂の縁日は、旧暦の3月15日。最近では、それに近い土曜日か日曜日に行われている。



神宮寺毘沙門堂

八つ面神社

八つ面神社は、江戸時代八つ面谷の中腹の標高 20m 東側の岩盤上に造営されていた。北の山裾には湧き水の池をかかえ、東の山裾は地御前の地質には珍しい粗花崗岩があったもよう。祭神は、古来水神として八岐大蛇が祀られていた。しかし、昭和 21 年 6 月 (1946) 神社規届出の折り素戔鳴尊に改められた。素戔鳴尊は農業用水の神様で、天孫系の速谷神社や巖島神社が鎮座する以前の出雲政権時代の伝統を有する古社である。明治 5 年 (1872) に、地御前の北の出入り口八つ面谷あいに移転された。

現在の社は、昭和 10 年 (1935) に再建される。



八つ面神社

神話によれば、平良・原地区の北方の山、極楽寺山標高 661m にある蛇の池に大蛇が棲み人畜に加害するので、素戔鳴尊が大蛇を追い出し、榎愛窪（可愛川）に至り大蛇を切り殺した。その時、大蛇の頭が空中を飛んで八つ面谷の南の入り口大沼に飛んできて落ちたので、ここに祀ったのが起源で社が出来た。

八つ面は、大蛇の八個の首（頭）ということで、地御前に一個の首だけでは

おかしいが、他のどこかに飛んでいったのでは？その裏付けとして出雲の国境の赤名峠から地御前までの古い道筋(110km)には、最短で10km 最長で20kmの間隔で八つ面と言う地名や社がある。

八個の首は、赤名峠・双三郡布野村・吉田郡山・上根峠・可部祇園・安佐伴・五日市石内・地御前の地に飛んだと言われている。これらの地は、出雲より赤名峠を越えて以西の古い道筋に在るが、出雲の神々(人を含む)が、これらの地点をベース・キャンプとして遠征(分村植民)して来たのであるまいか。現に地御前地区には江戸時代のことらしく、また、理由不明であるが「昔、四つの家系の者の先祖と一緒に出雲より移住して来た」との伝承があるとの事。(吉本 宇一 氏談)

また、八つ面神社には明治時代に入って怪異伝説がある。明治初年に村内各地小さな社を合祀しようとした際に、春から夏の好天気であったにも拘らず、八つ面神社の上空がにわか曇り、神社付近の谷合いに甘雨が降った。しかも、便所等不浄の所を除いて降ったので、村民が争い来り、木葉を取り甘露をなめたので木葉が一枚もなくなった。村民はこの現象を神意が合祀に反対であると解して、地御前では神社の合祀を取りやめた云々との言い伝えがある。



八つ面神社

鹿の子地蔵

鹿の子山の麓、神賀の里の祠、鹿の子地蔵（水子地蔵）が建立されている。地蔵堂は、宝永7年（1710）に建立されている。本尊は、古木像が20体余りあったそうですが、現在は数体になっている。

木彫りの地蔵は珍しく作者は不明ですが、泣いた顔・笑った顔・怒った顔・様々な表情の地蔵菩薩です。これは、子供を失った母や水子をいとしんだ女人が奉納したものとおもわれる。仏像調査では、十王仏であることが分かった。堂守さんは、権現様と聞いているといわれている。廿日市町資料編には『本尊は地蔵菩薩にして真言宗である。神賀にありて境内五坪』とある。

8月24日縁日には、金剛流の節で御詠歌を唱えし、更に、賽の河原地蔵和讃を奉唱していた。

御詠歌は、十三仏御真言御詠歌地蔵菩薩に「救わでやまぬ」とあるから、「救われ賜ふ」に変えられたのであろう。無仏世界というのは、釈迦入滅から彌勤仏出世までの五十六億七千万年間のことで、釈迦如来の付託を受けて地蔵尊が済度に当たられるという教えがある。



鹿の子地蔵

境内にある石灯籠は古いもので、文政3年（1820）に奉納されたものでお堂の周りには、ハナミズキの花を左右に植え、又、4月

ごろには傍らの畑に咲く牡丹はさわやかな風に揺れて供華さながらである。

鹿の子地蔵の横には、平成22年2月（2010）に、鹿の子地蔵案内板が設置された

龍宮神社

地御前村の大土手（御手洗川より港町の土手）の築調が、元禄 7 年（1694）に始まり、龍宮神社が造営された。それ以前は、地御前神社の周りに、金毘羅社がありその周辺にあったとも言われていたが定かではない。また、一説には二つ山の上にあったとも言われておりこれも定かではない。御神体の名前もいま一つ？龍宮神社は、漁業者の守り神で、平成 8 年 3 月に再建され、旧暦の 2 月 9 日に貝祭りが行われている。港町埋め立て後、龍宮神社の裏側に井戸が掘られ近隣住民が水汲みをしていた。



龍宮社

松見山正行寺

浄土真宗本願寺派松見山正行寺と号す。本尊は、阿弥陀如来立像 浄土真宗以前は、天台宗で江戸時代寛永元年 (1624) に改宗された。当時の住職明順によって改名された。現在の本堂は、文久2年9月 (1862) に改築されている。

正行寺には不動明王坐像が安置されており、不動明王坐像は室町時代後期の作で、享徳時代 (1452) 頃の作と言われている。不動明王は如来の使者とも言われ、大日如来の^{ふんぬしん}念怒身となって最高の明王となります。仏像の像高 24cm・膝張り 18cm の寄木作りで仏像の^{けんはつ}巻髪はよく巻いていて、弁髪は左の肩まで長く垂らして、^{ふんぬ}歯牙は2本下から上に向かい力強い念怒の相を表わしており、右手に利剣、左手に^{じょうさく}条索を持ち^{しつしつ}瑟瑟座に坐している。仏像は、廿日市市重要文化財として昭和60年1月24日に取得。

境内に菩提樹の木が植林されており、この樹木は国内では珍しい樹木で、樹



松見山正行寺

木の葉が大きく、インドでは僧侶が修業の際木陰として休まれたといわれている。

正面の山門は、地御前の宮大工、中谷新七氏によるものである。彫刻と手の込んだ素晴らしい組立で、明治時代後期の作である。また、経堂・鐘堂の施工も、中谷新七氏によるものである。その他にも、地御前の町の俵神輿のやぐら（ヒノキ作りで彫刻を施し真鍮を飾り組み立て式）の施工もした。また、サンフランシスコの日本庭園の太鼓橋を造られ好評を得られたのも有名です。



不動明王坐像

智秀山西向寺

浄土真宗本願寺派。伝承によれば、僧玄正が寛永 2 年 (1625) 旧大野町東部に開基したが、当時は宗派が違っていました。(真言あるいは天台か?) 四世宗玄が貞享 (1684~7) 頃に浄土真宗本願寺派に改宗し高取の正傳寺の末寺となりました。おそらくこの頃、地御前神社への参道普請のために智秀山を分断した隧道を利用して平地を広げ、寺基を移転したと思われます。

現在の本堂は、明治 15 年 (1882) に平良村水口禎助棟梁により上棟されましたが、五日市坪井三宅の門徒衆より外陣内陣を拡張すべきとの発議があり、屋根の小屋組みに対して内部が広いという特徴を備えた本堂となりました。

明治 44 年 (1911) 頃の親鸞聖人 650 回大遠忌の記念事業では、地御前中谷新七棟梁、大野伊藤佐市棟梁によって、御経蔵・鐘楼門が建立されました。他にも垂水鉢の設置、一切経並びに^{ぶだいし}傳大士像の奉納、仏具が新調されるなど、現在の本堂境内の景観がほぼ整えられたようです。



智秀山西向寺

近年では、平成 13 年に本堂・鐘楼門を本瓦葺きに改修し、平成 26 年に親鸞聖人 750 回大遠忌記念事業として御経蔵の改修・塀の改築・石畳の新設・バリアフリー化など整備が進んでいます。

鐘楼門から入ると左側に「菩提塔」^{ぼだいとう}があります。明治以来繰り返された戦争による全ての戦死者戦災者追悼のために建立されました。特に海外移民の辛苦と原爆の惨禍を、決して忘れないという決意を後世に伝えるためのものです。昭和 20 年 9 月 6 日の原爆死者の月命日に始まった「菩提講法要」^{ぼだいこうほうよう}は、現在も毎月 6 日に午前 8 時からお勤めされています。

境内を覆う松は「天井松」です。樹齢 260～340 年です。晴れの日には木陰を作り、地面に本堂の格天井^{ごうてんじょう}のような影を落とします。また、雪が降っても枝につもり、本堂まで雪を踏むことがないことから「天蓋松」^{てんがいまつ}とも言います。山門の横にそびえ立つ銀杏は、天井松より 30～50 年古い木で、秋の紅葉は周囲の景観に溶け込み実に鮮やかです。

西向寺は水脈に恵まれ、昭和初期まで井戸が三カ所あり、近所の方々が水を汲み、地元の勝谷酒場はこの井戸水で仕込みをしていました。

昭和 41 年(1966) 設立のボーイスカウト第 5 団は西向寺に本部を置いています。第 15 世住職板垣公裕団長の下、青少年の自発的な社会教育運動を盛んに展開しています。



天井松(蓮華松)



地御前神社の御陵衣祭は、旧暦の5月5日端午の節句に執り行われます。昭和年代終わりころまで、巖島神社から神馬を船に乗せて神職と共に渡ってこられた。

祭典は、先ず神饌や祭典に奉仕する神職及び参拝者を祓い清める「修祓」^{しゅぼつ}に始まります。次に齋主並びに祭員は客人社に進み着座します。これより客人社における祭典が開始され、神前にお供物を奉獻する「献饌」^{けんせん}（この間奏楽）齋主祝詞奏上、齋主玉串奉奠^{ほうてん}、神前のお供物を撤下する「撤饌」^{せつせん}（この間奏楽）の次第で執行されます。続いて齋主並びに祭員は大宮社に進み着座します。これより大宮社における祭典が開催されます。次第は客人社と同じですが、齋主玉串奉奠に続き地元の代表者や、初節句の男児が玉串を奉奠します。

祭典終了後、舞楽が二曲奉奏されます。一曲目は「蘭陵王」です。別名「陵王」とも称されます。中国六朝時代の北斎国王蘭陵王長恭は周の大軍と戦い大勝を納め、勇名を天下に轟かせました。その武勲を賞賛し、その勇壮な様を模して造られたと伝えられています。舞人は竜頭を頂いた面を被り、赤色の裃襠装束^{りょうとう}を着け、一尺程の金色の桴^{ぼち}を持って舞います。舞振りは頗る迅速軽妙です。

二曲目は「納曾利」です。この舞は「蘭陵王」の答舞で雌雄の龍が昇天する姿を模したと言われています。二人舞と一人舞があり御陵衣祭は一人舞です。舞人は萌黄色の裃襠装束^{もえぎ}を着け、一尺程の銀色の桴を持って舞います。舞振りは活気があって頗る面白く、手振り足使いは大変巧妙です。なお、舞楽の曲目は一定ではなく、数年前には「納曾利」に替えて「還城楽」^{げんじょう}が奉奏されました。また雅楽・舞楽の演奏には鞀鼓^{かっこ}（献饌、撤饌、蘭陵王）三鼓^{さんのかづみ}（納曾利）、太鼓、鉦鼓、笙^{ひちりき}（献饌、撤饌、蘭陵王）箏^{りゅうてき}、龍笛^{りゅうてき}（献饌、撤饌、蘭陵王）、高麗笛^{こまぶえ}（納曾利）が用いられます。

御陵衣祭の祭典開始前には、神馬に飾りつけを施し、お供の人も白張を着け、神職の御祓いを受けた後、獅子頭に先頭にされ、地御前の町内を巡行します。

*天保年間時代(1839)頃は

5月3日 巖島より神職渡海の後、お供・祝詞・上郷柗舞・人長の舞・東游神興お旅所へ。神馬お渡りの儀。

5月4日 お旅所で奏楽。獅子舞。

5月5日 お旅所より還御。還御後、流鏝馬。舞楽、陵王・納會利。

天保年間は、3日間外宮地御前神社で祭典が執り行われました。



御陵衣祭

流鏝馬神事

流鏝馬、地元の人々は「馬飛ばし」が愛称になって親しみを感じる地御前村の祭りの一つで、親戚や友達が集まって賑わったものです。

流鏝馬は、中世期に武士が狩りに出かけるときは、狩り装束に身を包み、騎手が馬を走らせながら矢を射る技術が要求され、馬術と弓術を一体として会得する訓練方法の一つにしたのが流鏝馬の始まりである。鎌倉幕府を開いた源頼朝が文治3年(1187)に流鏝馬神事を始めたとも言われる。

地御前村の流鏝馬神事は、豊臣秀頼の時代に、安芸の国の藩主安芸の守が奉納馬を仕立てて参拝したのが始まりで、流鏝馬神事が始まって以来400年以上の歴史がある。



流鏝馬神事(その昔)

また藤原親実が巖島神社の神主の職に任命されて、親実が桜尾城主に移住したことから、鎌倉時代の武芸の一環として、流鏝馬神事が導入されたともいわれる。慶長3年(1598)には馬が3頭で、明和7年(1770)2頭になり、文

政2年(1819)には1頭になった。元禄15年(1702)頃は、馬が3頭で、観衆が竿竹をもって馬を海辺に追いやり海に近いところを走らすと、今年は豊作と言われた。

地御前の流鏝馬も、昭和42年頃(1967)から農家の時代変革により馬や牛を飼わなくなり一時中断した時期がありましたが、地域の方からの強い要望で、昭和57年に再度復活することが出来ました。流鏝馬は、色々な地域で開催されており、他の地域では馬を走らせ騎手が弓矢を射ております。地御前は、昭和40年ごろまで弓矢は射ないが、地御前街道を3回走っていました。第1回は、両手綱を持って走り、2回目は片手綱で走り、3回目に両手綱を放して走り、観衆が青竹竿で馬を叩くので馬主は馬が傷つくので馬を出さなくなったとも言われています。また、参道が都市化によるアスファルト舗装により馬が走れなくなったとも言われています。

現在では、騎手が馬上より3か所の的に弓矢を射て、馬主が手綱をとって歩く形をとっている。現在の装束は、平成17年と18年に新調されたもので、以前の衣装は、慶長元年と衣装ケースに書かれている。



流鏝馬神事1

駄洒落

端午の節句は、菖蒲とヨモギを束ね軒に揚げ祝ったことから「菖蒲」の節句。また、菖蒲が「勝負・尚武」の節句と洒落によるもの。節句の夜は菖蒲を風呂に入れ薬湯にしたことから「薬味」の節句ともいわれます。



儀の射的馬鎊流

神馬巡行の儀

^{しんめ}神馬（白馬）は、昭和 30 年代までは、巖島神社回廊の入り口の神馬舎で飼われていた。参拝者が餌を与える前に、「おまわり」と言うと、馬舎の中を一廻りする賢い神馬であった。神馬は栗毛であっても神社で飼われると、白馬になると言われ、宮島の七不思議の一つである。御陵衣祭（旧暦の 5 月 5 日）には、神馬と巖島神社の神職がそれぞれ船に乗り地御前神社にわたって来られていた。

御陵衣祭の祭典が始まる前、神馬には衣装をつけ背鞍に^{しもろぎ}神籬を立て、たてがみと尾に紙垂^{して}を着ける。そして神職のお祓いの後、獅子頭を先頭に付き人に引かれて、地御前地区を巡行する。

現在神馬の役を担うのは近隣の県（岡山県、山口県）で飼われている馬である。



神馬お渡の儀



神馬お渡の儀

有府水門(有府の港)

明治時代前期まで、地御前神社前は海で有府水門は有府の港・御鏡の池ともいわれた。水門は、佐馬場谷から流れ出す田屋川と、木上谷から流れる平原川の合流地点に、海水を堰き止めるための樋門があった。

旧暦 6 月 17 日、管絃祭で海が荒れ波が高いとき、御座船を一時避難させ、渡御の神輿を外宮地御前神社に奉還して、管絃船をこの入り江に係留して波が治まるまで待つ港。神輿を御座船に乗せるようになったのは、明治 14 年(1881)で、神主が笛・太鼓・鉦鼓など、御座船で奏でられるようになった。

川を有府川と言ひ、有府川に架けられた赤い橋を外宮橋と言う。この橋は明治 13 年(1880)に往還道が出来た時に作られた。大正 15 年(1926)に電車が走るようになり、昭和 7 年(1932)に観光道路ができ、港として利用できないが、昭和 22~23 年頃の夏には、貸ボートに係留されていた。



旧 有府の港

お洲掘り

期日は、旧暦の6月15日

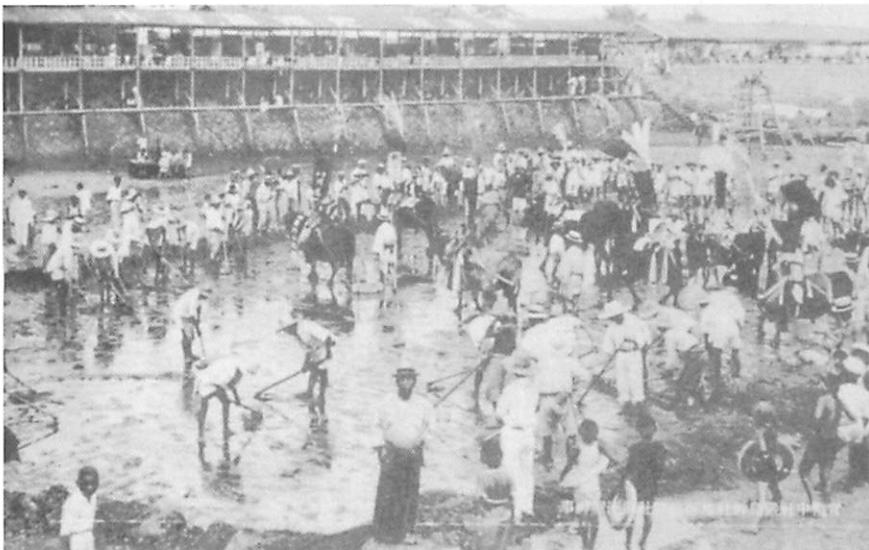
地御前神社前の、明神が浜の御池で御座船を迎えるための行事で、地御前村・宮内村・平良村・佐方村の各村が奉仕していました。当日は、引き潮に合わせてミヨギ（御座船が入る印柱。^{みよぎ} 濔木と表記し、読みはミオギが正しいと思われ
ますが、地元ではミヨギと発音されます）の内側の洲を掘り、終る頃、牛に漆塗りの鞍をつけ、各家々の家紋の入った幟を立てる。10数頭の牛が先牛に従って、鮮やかな手さばきにより、馬鍬^{まぐわ}をつけて代掻き^{しろか}のように引きます。舞進するさまは観衆を楽しませてくれる場面です。そして御池の沖側に、高さ10mのミヨギを両側に立てます。管絃祭の当日には、巖島神社の御社紋（^{けんはなびしみつ} 剣花菱三
^{きっこう} 亀甲 --- 三つ団子）の入った印の大提灯をミヨギに吊るします。

お洲掘りが終わると、地御前神社前に、奉仕者や牛が御神酒をいただいて行事が終了します。

昭和20年代まで行われてきたが、現在は見ることはできません。

なお、ミヨギたては、現在地御前漁港の人達が御奉仕されています。

巖島神社のお洲掘りは、旧暦の6月11日に行われる。



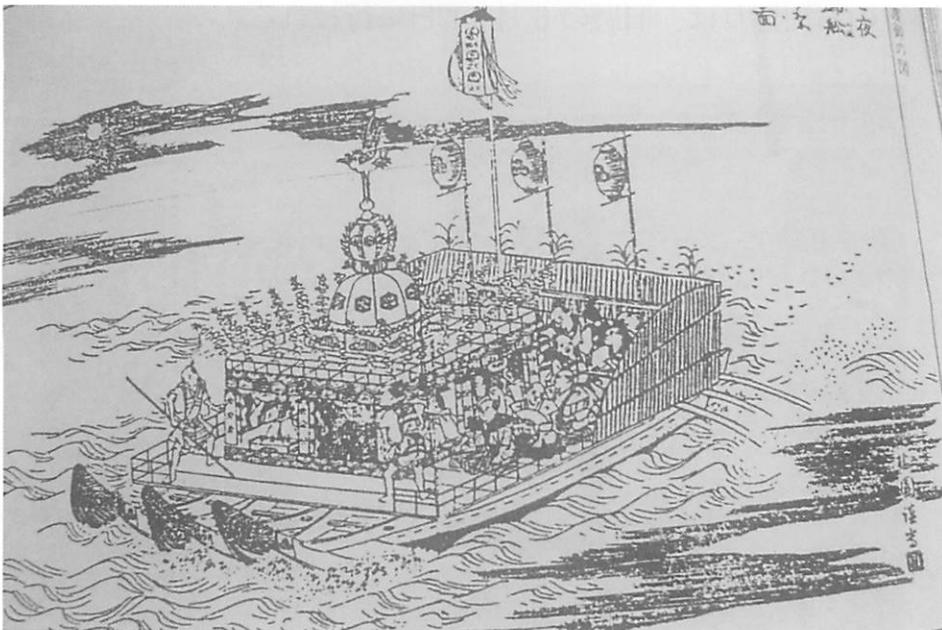
御洲掘り(その昔)

管絃祭

管絃祭は、旧暦の6月17日で地元では、「十七夜」とか「おかげんさん」と言われ地元のお祭りとして、古くから親しまれてきたお祭り。

管絃とは、龍笛・太鼓・笙^{しょう}・篳篥^{ひちりき}・鉦鼓^{しょうこ}などで合奏する大陸から伝わった音楽です。

管絃祭は、平清盛公が現在の厳島神社を造営されてから始められたという伝説がある。その時代、宮島には住民が住んでいなかったため、対岸の地御前神社から船を浮かべて、長浜神社や大元神社を経て御本社厳島神社で、管絃を奏でたのが始まり。永暦元年(1160)に平清盛が初めて厳島神社に参詣して、宮島に住民が住むようになって厳島神社から管絃船が出るようになった。御座船は、今は3隻並べて組んでいるが、その前は、大きい御座船が1隻で、櫓が6挺あったが、元禄3年(1690)からこぎ船が曳くようになった。こぎ船は、江波(櫓)12挺に阿賀(櫓)6挺が引き船になり、船の御前で子供が法被に鉢巻き姿で太鼓に合わせて船頭の木遣り音頭を踊る。水先案内は、地御前の三つ団子(厳島神社の社紋)を乗せた船。



管絃祭絵図

神事は、午後より巖島神社で祭典があり御鳳輦ごほうれんを御座船に乗せ（御鳳輦は明治14年(1881)から乗せるようになった）出発前江波の漕ぎ船が、神社の枡形を3周まわり御座船を曳いて阿賀船と地御前の対岸火立岩に向かう。火立岩沖に停泊して潮時をみはからって、御座船の提灯に燈明を入れ松明を焚く。江波の漕ぎ船のみ先行して、地御前神社拝殿前で木遣り音頭「きそいえ踊り」かい「權踊り」を踊る。明治14年から、能美島（高田）の船が御座船の後ろで、お供え船として従い、ぼんぼりに明かりをともした頃、地御前から村長はじめ村の関係者を乗せた水先案内船が御座船に向い、御座船は水先案内に従い御池に進む。管絃船では献饌・祝詞奏上けんせんの後管絃が始まる。まず、「三臺塩」さんだいえん「五常楽」が奏でられ、御座船が御池を3周する間「陪臚」はいろを奏で長浜神社に向かう。



管絃祭

地御前の町屋

地御前の町屋風の建築物が段々と数が少なくなっている。最近では、町屋建築がリホームされ、画影が多少異なっている。町屋は屋根の低い二階に厨子（ズシ）が設けられ、軒裏や垂木の柱及び窓の格子など外部に露出する木部を漆喰で（シッコイ）塗り込んでいる。軒下に設けてある袖壁・出格子・虫籠窓（ムシコ）は、地御前に一軒見られる（佐伯仁邸）。二階部分の壁格子を壁土と漆喰で塗り込めて古い町屋風にとどめている。



町屋 佐伯邸

町屋の一部には、二階部分の窓に木の格子をはめ込んだ格子窓がある。これは、採光をとるためでガラス窓にしたものもある。その他に、横格子の与力窓で格子を「捻り格子」で塗り込めたものもある。袖壁は町屋には設けてあり、軒下の両妻に吐出したものをいう。風切・日返し・目隠し・袖返しなどともいわれるが、屋根面より高く突き出た卯建（ウダチ）とは意味が違う。袖壁には、漆喰で模様を施したものもあり、装飾的な要素を出しているものや、著しく柱のうちに収めた格子や、格子戸を設けたものもある。大戸にはくぐり戸に障子

紙が張られたものや、駒寄が取り付けられた家があり（村上清和 邸）、犬走りの部分に木柵を設けて軒下の空間を通りから区切るためである。

忍び返しは、防盜のため、塀の上に立てて並べたもので、割竹の先を尖らせた忍び返しが見られる。

雨よけには、妻側の出っ張りが少ないので、雨の害から建物を守るために妻側の壁面に張りつけたもので、板を縦に張った羽目板張り、横に張った下見張りがある。



町屋 村上邸



明治 6 年」(1873) 4 月 5 日地御前小学校のまえ、必燐舎の名前で釈迦堂を教場として、教師 3 名 松野了明・板垣実明・松野香巖いずれもお寺の住職で開校された。

当時の月謝 68 銭 2 厘・1 年 20 円 18 銭 4 厘

- 明治 9 年(1876) 4 月 1 日 地御前小学校設立
- 明治 17 年(1884) 8 月 二階建て校舎新築
- 明治 19 年(1886) 4 月 1 日 地御前村簡易科小学校に改名
- 明治 24 年(1891) 4 月 1 日 地御前村尋常小学校に改名
- 明治 38 年(1905) 4 月 1 日 地御前尋常高等小学校に改名
- 大正 12 年(1923) 4 月 30 日 校舎の改築落成
- 昭和 16 年(1941) 4 月 1 日 地御前村国民学校に改名
- 昭和 20 年(1945) 8 月 6 日 原爆被災者救援所
- 昭和 22 年(1947) 4 月 1 日 地御前村小学校に改名
地御前村中学校開設 24 年まで
- 昭和 23 年(1948) 3 月 1 日 ミルク給食始まる
- 昭和 27 年(1952) 5 月 3 日 昭和 26 年大歳神社の社殿の地を一段削り落としその砂を小林千古の生誕の地に埋め立て、そこに講堂が設立された
- 昭和 30 年(1955) 6 月 4 日 木造二階建て校舎落成(前側)
- 昭和 31 年(1956) 9 月 30 日 町村合併により廿日市町立地御前小学校と改称
- 昭和 39 年(1964) 5 月 11 日 管理棟第 1 期工事完了
- 昭和 39 年(1964)10 月 10 日 全教室に白黒テレビ設置
- 昭和 41 年(1966) 3 月 30 日 管理棟第 2 期工事完了
- 昭和 45 年(1970) 7 月 29 日 プール完成 鹿ノ子町
- 昭和 48 年(1973)11 月 25 日 カラーテレビ全教室設置

| | | |
|----------------|-----------|---------------|
| 昭和 49 年 (1974) | 6 月 3 日 | 新校舎 3 階建て落成 |
| 昭和 54 年 (1979) | 6 月 30 日 | 屋内体育館完成 |
| 昭和 61 年 (1986) | 9 月 16 日 | 管理特別教室棟改修工事完了 |
| 昭和 62 年 (1987) | 9 月 1 日 | 正門改修工事完了 |
| 平成 元年 (1989) | 8 月 17 日 | 校庭西側防球ネット取り付け |
| 平成 元年 (1989) | 10 月 26 日 | アスレチック撤去 |
| 平成 2 年 (1990) | 3 月 30 日 | 全教室テレビ取り替え |
| 平成 3 年 (1991) | 3 月 31 日 | 運動場改修工事完了 |
| 平成 18 年 (2006) | 7 月 19 日 | 校庭を掘り下げ遺跡発掘調査 |
| 平成 19 年 (2007) | 3 月 | 教室棟耐震改修工事完了 |
| 平成 20 年 (2008) | 3 月 | 管理棟新築 |
| 平成 21 年 (2009) | 3 月 | 体育館耐震工事完了 |
| 平成 22 年 (2010) | 3 月 | プール新築 |

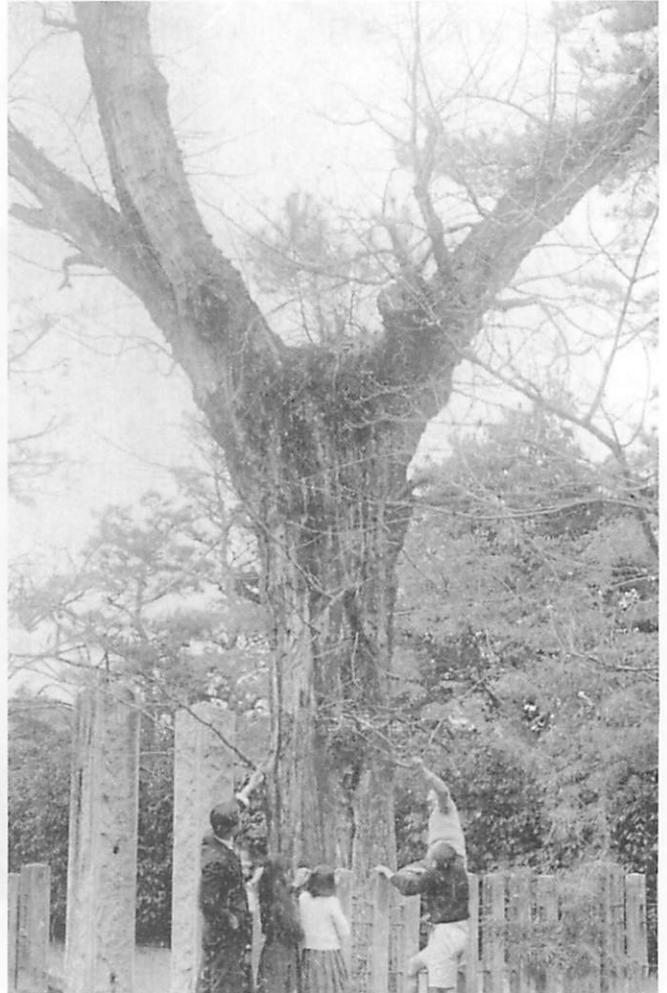


地御前小学校

大イチョウ

仁安 3 年 (1168) 頃地御前小学校の敷地は、神仏習合の時代で多くの神社仏閣が建立されており、その時代から大イチョウは樹立しておりました。現在は、小学校正門の横に樹立している。大イチョウはソテツと同じ原始的な裸子植物で動く精子を持っており、中国の原産といわれ日本には自生していない。大イチョウは、裸子植物銀杏科に属する中国原産の落葉樹の高木であり、秋の黄色葉が美しく、雌・雄の異株で春に開花し、雄花から飛んだ穂状の花粉は、二股に分かれて目立たないように雌花に到達するが、受精は 10 月で種子が成熟する直前おこなわれ、この時

に、精子が形成される。イチョウの種子は、熟すると黄色になり臭気がある一見果実のようであるが、植物学的には種である。肉腫皮は堅くて銀杏といわれ、内部の種が食用にされている。樹高 15,5m、(樹高は定かではではない) 幹回り 3,18m の雌株で市内最大のものである。もう一本雌株のイチョウの木があったが、大正時代校舎改築の際、伐採された。



大イチョウ



地御前公民館の始まりは、大歳神社を一段下げた時の砂を、小学校校庭に埋めて、昭和 27 年 (1952) に地御前小学校講堂兼公民館として新築され、20 年余り、いろいろな行事の場所として、また青年団の活動拠点として、その役割を果たしてきました。昭和 48 年 (1973) に元地御前村村役場の跡地に、鉄筋 3 階建ての公民館が竣工(一部子供相談室)。その後 20 年間、日常生活に密着した、楽しい学習の場や各種活動の場、公共性を持った地域住民のサロンの場所として利用され、地域住民の文化を高め社会福祉に努めてきた。特に、昭和 52 年 (1977) に広島は、県政の重点施策として、コミュニティを立ち上げるべく、県内 6 地区に推進地区を指定してきましたが、地御前地区がその一つとして選ばれ、コミュニティづくりの実践活動を支える役割を担ってきました。そして現在の市民センターは、平成 5 年 (1993) 4 月前公民館以東に、元相良味噌・醤油店跡地に新築されました。鉄筋 2 階建て、室数は、事務室・図書室を含め 10 室。活動は、生涯学習の場として、地域の方々に愛され、自主活動 (クラブ) 等、利用者は高齢者が多いのですが、明るく生き生きとしている。



地御前公民館の前身 村役場



金剛寺の建立は、正安 2 年 (1300) 頃であり、巖島神社の神主で桜尾城主藤原家 5 代目藤原親実は「金剛寺入道」と号した。

芸藩通誌には、元禄 7 年 (1694) 金剛寺新開が造成された記事はあるが、地図には金剛寺跡だけである。

扇新開が造成される以前文政 3 年 (1820) 頃、二つ山が海岸に迫り、山肌が海側にそそり立って、他の地域の土質より堅い岩盤なので金剛寺と名称がつけられたとの説もある。また、宗教的にも金剛寺が廃寺後も、金剛寺の名称が強く地御前の大字名として残っている。

御手洗川のいわれは、神武天皇が東征の際、この地に立ち寄って手を洗われたので、この名が付いたのだと言われています。その際、地御前ハイツ（金剛寺小学校）付近の、山の木の枝に衣をお掛けになられたので、その山を御衣尾^{みそのお}山と呼ぶとのこと。

御手洗という名が付いた地名は沢山あります。宮島の神社回廊裏を流れる御手洗川は、地御前から神主が舟で宮島に渡り、神社の前で手を洗い清めて神社に入ったからだそうです。しかし宮島の御手洗川は、現在の神社回廊の出口のところに流れており、神主は手を洗い清めてどこから入られたのか？宮島は神の島で人は住んでいませんでした。住むようになったのは鎌倉時代からで、住む場所としては、現在の回廊の出口の方であったといわれており、その当時神社回廊入口は、現在の出口の方であったと言われております。神社の玄関付近に人が住んでいては！ということで現在のすがたになったといわれております。これで神主が神社の前の川で手を洗い清められたことも理解できます。その他にも、江戸時代に潮待ち港として賑わった大崎下島の豊町の御手洗。山口県光市の室積港を囲む御手洗港があり、神功皇后が立ち寄った際に手を洗ったからだといわれております。



二つ山の頂上から地御前村の町が一望でき、正面の扇形に見えるのが扇園で、二つ山の下が、扇の要で「要町」の地名と言われている。二つ山の西側の地質は、他の地域より硬い岩盤（花崗岩質）であるため、地御前往還道が出来る前まで、文政年間（1820）頃は、二つ山が海岸に迫り出し、地御前村を東西に二分された形になっていた。よって、干潮時のみしか通行できなかったもので、普段は、賽の峠を通行していた。昭和 15～16 年頃まで岩風呂（伏田家）が開業されていた。また、昭和 25 年（1950）頃まで秋祭りの御神幸御旅所祭があったが、神輿を担いで、石段の上り下りが大変難儀をした。現在は、今市稲荷神社にて執り行われる。



二つ山

戦没者慰霊碑

金剛寺の新墓地に戦没者慰霊碑がある。その慰霊碑は昭和 41 年 3 月 (1966) に地御前地区遺族会が主体で地区有志の方々の努力で立派な慰霊碑が建立されました。慰霊碑の建設委員長は勝谷 廉氏。

慰霊碑の石は、のうが高原より運ばれ、石碑の書は、元衆議院議長の灘尾 弘吉氏です。

石工は奥野得三 (港町)・庭園は川本兵一 (鹿ノ子)・工建は品川照吉 (港町)、以上地元の職人が関わっておられる。

慰霊碑には、支那事変並びに第 2 次大戦における地御前・阿品・阿品台の戦没者及び原爆で亡くなられた学徒動員の犠牲者 206 柱が合祀されています。

毎年 8 月 13 日午後 6 時より慰霊碑前にて西向寺・正行寺導師のもと勤行で慰霊祭を盛大に行っています。



慰霊碑

賽の神とハゼの木

さい
賽とは、関所のことで他村から入る疫病や悪霊を監視する神様と言われていた。明治初期頃まで沿岸部の道路は、潮が満潮の時は通行できないため、「さいの峠」を利用していた。最近では、さいの峠を道祖神と呼ばれ手を合わせて通る人がいるとか？いつの日か、お正月にはしめ縄が、お盆には盆灯籠が供えられたことがあり、神仏習合の場所となっている。

伝説として、昔、有名な和尚さんが「さいの峠」で休んでいると、通行人にたびたび道を尋ねられるので、道標にハゼの木を植えて麓から石を持って来て、石碑を建てたといわれている。

「ハゼの木」はウルシ科で落葉樹、樹高 6,5m 幹回り 3,5m ハゼの木にキズタが巻き付き美しい調和を見せていたが、平成 4 年の台風によりハゼの木が半分割れ倒れる。

賽の神の場所は、金剛寺小学校グラウンド横です。

ハゼの木とキズタの木は、廿日市市指定文化財に指定された。

取得 昭和 60 年 7 月 12 日



ハゼの木

一里標と国道開墾碑

江戸時代の西国街道は、宮内村と大野村の境の四朗峠、大野村の四十八坂、玖波村の馬ためし、小方村の飛び石の窪、大竹村の苦の坂の難所越えの道のりのため、新しく往還道（新国道）が造られることになり、新国道は、海岸沿いに地御前の御手洗橋から大竹村の栄橋まで造られた。工事は、明治7年（1874）に広島元安川から廿日市まで、明治10年（1877）に廿日市から地御前まで、明治13年（1880）地御前から大竹栄橋まで。地御前の一里標は、広島市の元安川を起点に一里ごとに建てられたもので、また、地御前公民館の三差路に、「右広島道」と案内道しるべが、明治9年に建てられている。西国街道の一里塚跡の碑は、宮内の専念寺前に建立されている。また、道路の新設や改修にともなう、馬車交通に対応するための橋の架設が盛んにおこなわれた。



一里塚

新国道の完成記念として、地御前神社東側に、国道開墾碑が明治 20 年 (1887) に建立され、工事に携わった 510 名の氏名が碑の裏側に刻まれている。石碑の上に「地平天成」と刻まれ、この書は、有栖川宮殿下の書で（地平線はどこまでも天とつながる）の意味で、また、年号「平成」の出典の一部である。宮島観光道路は、昭和 6 年 (1931) に折からの昭和恐慌下で、激増した失業対策として国道改良工事が行われることになり、宮島観光道路は、その年の、4 月から着工されることになった。宮島観光道路は、昭和 8 年 (1933) に国道 2 号線に改称される。コンクリート舗装は昭和 9 年。また、西広島バイパスは、昭和 49 年完成。



国道開墾碑

盃状穴

地御前小学校の石垣で大歳神社寄りの角に、大型たこ焼きを作るのに丁度よい石垣が一つある。盃状穴石である。日本でも古くから石に対する信仰は存在していた。日本の盃状石は縄文時代から作られ、元々は磐座に彫られ、子孫繁栄や死者の蘇生を願ったものとされる。古墳時代までの日本の古墳にある石棺蓋石からも発見される。(径 3~10 cm程度の穴で盃状)

福岡県飯盛神社に盃状穴石の説明板があり、「古墳の蓋石」に使われていたのではと書いてありますが、地御前にははっきりとした資料は現在ありません。



盃状穴

地御前村出征記念碑

地御前神社の西側に、「皇威輝八紘」の碑が建立されている。この碑は、西南戦争・日清戦争・日露戦争に出征した村民の面影を偲び、民衆の間で軍国主義が一層浸透するように、日露戦争後、大正2年(1913)年建立された。

西南戦争 明治10年(1877)

日清戦争 明治27年(1894) 地御前従軍者 17名

日露戦争 明治37年(1904) 地御前従軍者 68名



地御前村出征記念碑



地御前南町遺跡

昭和 40 年 (1965) 南町の町道を消防貯水槽設置のため、掘り下げていたら、地表から約 3m 下の地層から、縄文土器片・獣の骨・魚の骨・貝類など約 1 万点が発掘された。これは、掘り下げた砂を釈迦堂横に仮置きした砂の中から、地御前小学校の児童たちが見つけ、遺跡発掘につながる。

当時、町役場は遺跡専門家の、広島大学松崎教授に調査を依頼し、縄文時代後期を中心とする前期からの遺跡であることが確認された。

地御前南町遺跡は、広島湾沿岸の遺跡の多くが早期と後期・晩期に属している中であって数少ない前・中期の遺跡を含んだ重要な遺跡であることが明らかとなった。また出土品には縄文時代の人々の暮らしを知るうえで多くの貴重なものが含まれていた。

石鏃^{せきぞく} (ヤジリ)、石槍などの狩猟道具、調理加工に使用された石刃^{いしぼ}、漁網のおもりに用いられた石錘^{すい}、木の実などをすりつぶすのに用いられたと思われる磨石などが出土している。また、焼いた跡のある動物の骨や貝類も出土しており、地御前南町遺跡の在る辺りに、当時住んでいた人々が、ここを拠点として野山での狩りと木の実の採集、海辺での漁業と貝の採集を中心として生活を営んでいたことをよく示している。

特に注目されるのは、石器の材料として遠く大分県の姫島から運ばれた黒曜石が多く使われており、また、土器の特徴にも東部瀬戸内海地域との密接な関係がうかがわれるものがみられることである。瀬戸内海を利用した活発な交流があったのである。

平成 18 年 (2006) に地御前小学校の校庭を掘り下げ発掘調査が行われ、主な出土遺物は、縄文時代の後期から晩期までの土器が多量に出土したほか、どんぐりに似た「シリブカガシ」堅果類の遺存体が大量に出土した。

縄文時代中期 約五千年前

縄文時代後期 約四千五百年前

縄文土器は厚くて黒っぽく模様があって表面がでこぼこしています。

弥生時代前期

約二千二百年前

弥生土器は薄く赤っぽくて表面があまりでこぼこしていません



南町遺跡



出土品



野坂遺跡

元、逓信病院（現野坂中学校）下の道路、地御前村と宮内村の境、標高15m 切り通し部分に位置する場所で、昭和27年（1952）村道工事中に地表下約10m のところから、工事に従事し、宮内の佐原田に住んでおられた川西政市さんが、瀬戸系瓶子一点、正位の状態で発見された。発見当時、瓶子の中には骨らしいものが埋納されていたといわれ、詳しい状況は定かではないが、地御前村野坂地区は、厳島神社の宮司を勤める野坂家の一族がかかわりのあったところと言われていることから、野坂家一族の者の骨が埋納されたものであろう。

また、その他にも石^{せきぞく}鏝1点のほか弥生土器・土師^{はじききへん}器片が採取されている。また灰^{はいゆう}釉の瓶子は、発見時口縁部は欠損していた。高さ25cm 肩部は最大径16cm、底部径7.5cm、模様は台形状とひし形を交互に表した文様であった。こうした古瀬戸の焼き物の発見地は、中国地方では福山の草戸千軒遺跡が名高く、厳島神社にも立派な古瀬戸瓶子が宝物として伝世されていますが、その数はいたって少ないようです。貝塚は丘陵南側の山麓に位置し、貝層のひろがりも小規模で、アサリを主体としている。時期は明確ではないが中世期以降の貝塚である。

桃山遺跡

地御前小学校の裏山（南西に位置する桃山）を、昭和59年（1984）に宅地造成工事が行われた際に、丘陵南側で、弥生時代後期の土器片が30点採取された。

さらに、地御前神社境内からも土器片が採取されており、この低丘陵をとりまくように、弥生時代の遺跡が存在するのではないか。



ささいぐん
佐西郡の山城—神主家跡目争い—大内氏安芸国支配—桜尾城—大内義興死亡
—藤原神主家滅亡—陶晴賢謀反（大内義隆 長門で切腹）—折敷畑おしきばたの合戦—巖島
合戦

天文23年(1554)5月折敷畑の合戦から翌年の巖島合戦にかけて約1年半の間、佐西郡（廿日市・大竹・佐伯郡一帯は、中世においては佐西郡と呼ばれていた）は毛利と陶の対決の主戦場となって各所で戦いが行われた。折敷畑の合戦以降も陶方の勢力下にあった山里（佐伯町・吉和村・湯来町白砂一帯）では、軍事的緊張状態が続いたものと思われ、「森脇覚書」によれば陶方によって高森城が築かれ、対抗して毛利方も向城として狼城を築城している。また、大野にある門山城は大内氏が安芸進出の拠点とした城であり、毛利氏はこれを「破却」して抵抗勢力の根拠を奪っている。

中山城（佐伯町河津原）・溝迫城（佐伯町友田）はこの時期新たに築城されたものかどうかは不明だが、郭の周囲に堅堀・横堀、あるいは畝状堅堀群を設けて厳重に固めており、当時の緊張状態を彷彿させる築城となっている。

この頃、佐西郡は神領と呼ばれ神主家の本拠として桜尾城が築かれていた。神領衆は土着した神主家の一族や神主家と主従関係を結んだ在地の土豪などから構成されていた。巖島の神領であった佐西郡は、そのころ隣接する大名勢力との兼ね合いに悩んでいた。東は安芸の武田氏、西は周防の大内氏。二つの勢力争いの中に巻きこまれるしかなかったのである。藤原教親のりちか（応仁の乱の西軍として参加。神主であると同時に武士的性格を兼ね備えていた。毛利一族長尾氏の出身で藤原氏の養子として神主家を相続した。）及び宗親の死後、神主は宗親の子、興親に移った。だが興親には子どもがなく京都で死ぬと国元で跡目争いがおこった。これが争乱の始まりだった。

（洞雲寺は長享元年（1487）藤原教親および子の宗親によって建てられた神主藤原氏の菩提寺である）。

西軍

東軍

| | | |
|-------|----------|--------|
| 小方加賀守 | 神主親族リーダー | 友田興藤 |
| 藤掛尾城 | 城 | 桜尾城 |
| 新里若狭守 | 神領衆 | 宍戸治部少輔 |
| 大内氏 | 応援の大名 | 武田氏 |

友田興藤と小方加賀守はともに神主に補任されることを望んで大内氏に訴えたが、大内義興は神主を置くことをやめ、神領を自分の支配下におき、桜尾城には大内側の者を城番に置くことを強行した。これに対し、許せぬと友田興藤が挙兵すると武田氏も加勢し桜尾城を攻め落とした。興藤はひそかに出雲の尼子氏（尼子経久）に加勢を求め、尼子氏は毛利・吉川氏も従えて南へと進軍し、大内氏の拠点鏡山城を北から攻略するのに成功。これに対し大内義興が反撃を開始。義興は息子義隆を伴い瀬戸内海を進んで、興藤方の番衆を厳島から追放すると、厳島を占領し、ここを本陣とした。しかし桜尾城を大内軍は攻めあぐね、陶興房も講話策をとった。興藤も武田氏や尼子氏の救援が望めぬまま窮地にたっていたため、講話策を呑むことにした。（友田興藤の兄の子で藤太郎を厳島神主とすることで講和は成立した。）しかし興藤はおもしろくなかった。大内義興は山口に帰らず本陣も解けなかったのである。一方神主家の実権は相変わらず興藤が握っていた。

大永 5 年 (1525) 大内義興は安芸国を支配すべく進軍。大将は陶興房。武田氏を破り、本拠の金山城まで迫った。しかし大内氏を支援するため派遣されていた大友軍が急に帰国したため武田氏を生き返らせることになる。そして大内義興が突然の病にたおれる。やがて山口にて亡くなる。跡を継いだ大内義隆は陶興房の子、陶隆房（後の晴賢）の活躍もあって備後や筑前に勢力を一層広げていった。

桜尾城、友田興藤は 10 年間中立を装って我慢し続けたが天文 10 年、興藤の不満が爆発、尼子氏とひそかに手を結び大内氏に反旗を翻した。まず厳島から大内軍を追放した。ところが援軍に来るはずだった尼子軍は、毛利氏の郡山

城を包囲したが、宮崎長尾の合戦で毛利氏に敗れてしまった。安心しきっていた友田興藤は、大内軍の船団に再び厳島を奪われ五日市城にたてこもり広就も切腹し、300年続いた藤原姓神主家は滅亡したのであった。大内氏は杉隆真（景教）を神主に、桜尾城には大内の家臣鷲頭治部少輔を城督として置き、大内氏の本格的な安芸国支配が始まった。

しかし、大内義隆は天文20年（1551）陶晴賢の謀反にあい、長門の大寧寺で切腹した。陶軍は挙兵に先立って厳島を占領し、桜尾城挙中に収めた。

天文23年（1554）5月12日陶討伐の為、毛利元就は進軍を開始した。まず、金山城・己斐城・草津城を攻略し、石道（石内）と五日市で大内方の兵を破り廿日市へ進んだ。当時、桜尾城には大内・陶氏の家臣などが在番していたが、説得に応じて城を明け渡した。更に毛利軍は厳島に渡海し、陶方家臣を追放して島を占領した。

これに対して、石見津和野三本松城の吉見正頼（大内義孝の姉婿）を攻撃していた陶晴賢は、家臣の宮川甲斐守に兵を援け、安芸に向かわせた。宮川甲斐守は途中、周防玖珂郡の山代衆などを合わせ、毛利方の本陣がある桜尾城を見下ろす形で、戦略的に優れた折敷畑に陣を敷いた。毛利氏側はやや苦しいと思われる対陣に対し、6月1日、小早川隆景の軍は海辺より宮内・地御前の方向に向かい、七尾の西方から敵の本陣に突進する。吉川元春の軍は折敷畑の山北に進出して、敵の本陣に側面から攻撃する。宍戸隆家・福原貞俊の軍も折敷畑の山北に迂回し、敵の攻撃に乗じて側面からこれを襲撃する。元就及び隆元の本隊は本道筋より正面攻撃を賭け勝敗が決し、宮川甲斐守自刃。宮川勢は7千人の軍勢で死者7百50余人、これに対して毛利勢は3千人の軍勢で死者70余人、これが一日で終わった折敷畑の戦いでした。又毛利軍が出発しようとしたとき、厳島神社の柵守野坂房頭の使者石田六郎左衛門が来て、御供米と巻鮓を元就に献じました。元就は大いに喜び、「厳島神社の加護によって今日の戦いは必ず勝てる」と将士を激励したと陰徳太平記、その他に書いてあります。

弘治元年春から毛利方は厳島有の浦宮尾に築城を始める。宮ノ城とも宮尾城

とも言う。(現在連絡船の着く宮島棧橋の南の丘) 当時は三方が海に臨んでいた。城将として己斐豊後守と新里宮内少輔が選ばれ約五百人の兵が従った。この両援は旧大内氏の己斐城・桜尾城の守将で義隆滅亡後は陶方であったが、天文23年、毛利方に降った。元就は豊後守に、忠勤を励むことを感謝し領地を与えることを約束していました。

宮尾城は5月13日陶軍の攻撃、7月7日の陶方白井越中守賢胤の攻撃にも落ちず。この争いが陶方全軍をあげての渡航となるのです。晴賢は厳島神社での秋の法会の終了を待って、9月21日晴賢は、警固船1,200余隻に分乗、岩国の今津・室の木から出航、厳島に上陸しました。塔の岡(千畳閣)を本陣とし、兵船は長浜・有ノ浦から須尾浦にかけての海岸に碇泊、船首を廿日市・草津の方に向けて警戒しました。

なぜ陶晴賢は厳島に陣をはったのか？それは、厳島は海上交通の要であり軍事上の重要地点でもあった。また、厳島が神の島であり、古来、一切の不浄・汚穢を許さないという信仰だから神社の中で合戦が起る筈がない、という所謂良心的な観測があったのでは。元就も信仰の厚かった人と言われていますが、同時に信仰心を利用した人とも言えます。

陶軍は、まず三浦房清を将として一気に宮尾城を攻撃、大勢は落城近しとの情勢で元就は吉田郡山城を3,500騎で発する。従う者は長男隆元・次男元春・三男隆景をはじめ、国人衆及び毛利譜代の者共。この厳島合戦は簡単に言うと海を挟んでの戦いですから水軍の戦力が大きな要素であることは明確です。陶方には防洲の海賊衆が味方し、毛利方には太田川河口の警固衆が味方する。しかし毛利方の水軍は劣勢で、瀬戸内海水軍の専門家である海賊衆、三島村上、即ち因島・来島・能島の村上氏がどちらに味方するかは大きく戦いを左右したのです。9月26日村上の警固船2~3百艇が音戸の瀬戸を経て、海賊衆は廿日市の沖に碇を入れる。野島武慶・久留島通康・村上宗勝とその一門家子郎等(野島村上)が毛利に味方したのです。

ではなぜ村上水軍は毛利方に味方したのか？それは陶晴賢が大内義隆を滅し

た後、巖島でそれまで村上衆が取っていた通交の警固料を禁止し、村上軍の恨みがあったと考えられます。

そして、毛利元就は地御前の火立岩という小山に本陣を敷くことになる。9月晦日の夜、風雨に乗じて火立岩から出航、包が浦に上がり博奕尾を越えて夜襲を掛けた。陶軍は敗れ、陶晴賢は大江浦で自害した。桜尾城主として桂元澄が置かれ、次に毛利元晴・秀元へと受け継がれた。洞雲寺には今も友田興藤・陶晴賢・桂元澄・毛利元晴の墓が残っている。

巖島合戦に勝利を収めた毛利氏は、弘治3年(1557)には大内氏を滅ぼし周防・長門を領国化し、戦国大名へと成長していく。



三光院は、昭和の初期、弘法大師を深く崇敬した智妙法尼ちみょうほうにが大師の靈告を受けて、廃寺より迎えた金剛界大日如来の尊像を本尊とし、弘法大師も合わせ祀り金剛院と号して、山口県に開山されたのが始まりである。

昭和 28 年広島県地御前の現在地に移転する。この地に鎮座する地御前神社は、神体島である巖島の本土ようはいより遥拝するための社で、神社創建の理由は、島全体が御神体で古代は人が常住できず、天候によっては渡航して祭祀が出来ないため、常に祭祀ができるよう巖島神社の外宮として創建された。地名も「本土の地にある神の御前」の意味から地御前となる。伝説によると平安時代に、本宮巖島神社と外宮である地御前神社に読経供養するための別当寺と供養僧の諸寺が弘法大師によって開山された。この時、外宮と別当寺、そして、地御前さんぼう しゅうせい一帯の鎮護としてこの地に塚を築き、仏法僧の三寶と衆生・寺社・土地・屋敷・かまど竈を守る守護神である三寶荒神さんぼうこうじんを勧請して祀られる。鎌倉時代に入り別当寺と供僧の各寺は宮島に移転したが、荒神は、外宮と地御前の守護神でもあったので残された。しかし、時代の返還により塚は荒れ果て忘れ去られていたが、この由来を知っていた智妙法尼が由緒ある塚の荒廃を嘆いて当院を塚の鎮まる地に移転し、荒神を当院の鎮守とし篤く祀る。山号は塚のあるあたりの字名が巖島大神の縁から大神でもあったことと、塚が巖島大神の外宮いつくしまおがみの守護である由来から大神山と号し、院号を金剛院から三寶荒神の威光にて守護とするとの意味で三光院と改称。旧、御室御所おむろ ごしやうそうほんざんにん なじもんぜき総本山仁和寺門跡の直末寺院となり真言宗御室派に属する。当院の弘法大師の靈驗あらたかなことから地御前的大師さんと親しまれ、荒神様のご利益も広大で、また、法尼の法力と慈悲溢れる人柄も相まって参拝の信徒は跡を絶たず繁栄する。法尼の遷化後、現住職の二世隆海僧正が跡を継ぎ、二人の弟子と共に一味和合の仁和の心を旨に精進し、布教と寺門興隆に尽くす。毎月二十一日の大師祭のご縁には多くの方々が参拝されている。

えんき
縁起……………神社や寺院の由来又は靈験の言い伝えを文章化した記事

ちみょうほうに
智妙法尼……………出家して仏門に入った女子のこと

さんぼう
三寶(三宝)…仏・法・僧 → 耳・目・口 → 身・口・意(心)

この世を表わす、土地・火・水を表わす三宝荒

神を表わす

しゅうせい
衆生……………すべての生命を表す

かまど
竈……………昔家の中に土で作ったご飯を炊くところ

いつくしまおおがみ
巖島大神……………地名

さんぼうこうじん
三寶荒神……………土地・火・水をつかさどる神様を表す

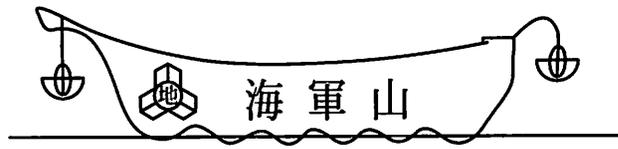
おむろ ごしょうそうほんざんにん なじもんぎ
御室御所総本山仁和寺門跡……………京都にある真言宗御室派総本山

仁和寺の最高の位を表す

広島新四国八十八ヶ所 第78番霊場 三光院



三光院



昭和 16 年 (1941) 12 月 8 日太平洋戦争開戦、昭和 17 年 4 月 18 日本土、東京が初空襲を受けた。

その後、名古屋・大阪など全国主要都市が空襲を受ける。海軍では本土の防空体制を強化するために、小高い山（後平山）（現在のキラキラ公園）に防空監視所（正式名称不明）の建設を進めた。

施設の概要

1. 聴音機（大型の集音器）現在の公園の西側にあった丘
2. 探照灯（大型のサーチライト）現在の公園の東側にあった丘
3. 火力発電所、探照灯の電源として、毘沙門堂横の余田公園の場所に、木造の建造物を建築
4. 煉瓦造りの建造物（指令室があったと思われる）
聴音機と探照灯の中間の尾根に建造物
5. 兵舎（兵士、約 20 名が居住できると思われるくらいの木造建造物）
煉瓦造りの建物から南側に下がったところに建築

監視所から敵機襲来の情報で、高射砲陣地から砲撃したと思われるが、五千 m から一万 m の上空を飛ぶため B29 には砲弾は届かなかった。戦後、海外からの引揚者が一時的に、兵舎の建造物を使用していた頃から、誰ともなくこの山を「海軍山」と呼ぶようになった。



宮島沖 日米軍の空中戦

昭和 20 年 3 月 19 日米軍は空母 16 隻から、持てる全ての艦載機を発進させ、呉軍港への猛爆撃がはじまる。艦載機の中の一部・グラマンヘルキャット戦闘機 7 機が地御前に向って飛んできた。それを迎撃したのが陸軍小月飛行場を発進した新鋭の隼戦 2 機である。米軍機の標的は満員の客を乗せた上りの旅客列車であった。やがてグラマン 4 機と隼 1 機の激しい空中戦が繰り広げられ、身軽になって戦闘をするため積んでいた爆弾 (25K) を投下して真っ青な上空を急上昇と急降下を繰り返し、機関銃を撃ちました。その爆弾 1 つが中谷家 (4 丁目 1-27) に被弾し、5 名の方が亡くなられた。列車は安全なトンネルで急停車して救われたが、隼 1 機が撃墜され厳島の長浜にある宮島国民学校の前の海に落ちた。勇敢な将校は九州大分県出身者の桜木大尉であった。

隼が発射した戦闘機用 13mm 機銃弾は地御前(扇園)にあった旭兵器工業(株)で製作したものである。機銃弾の多量な薬莢が、現野坂中学校の前、野坂・砂島に落ち、地域の方がバケツで拾い集め憲兵に渡したとの事である。尚、戦争中は、厳島で記念写真は撮っても良いが、神社・五重の塔は写しても、弥山は秘密の場所とされ全て消されている。

米軍が「真珠湾の - - - -」とした呉空襲の回数は、3 月 19 日以降、主な空襲だけでも 6 回を数え、2400 人 (2391 人) の死者を出した。真珠湾攻撃での米国側の死者は 2000 人であった。

相覧場と火立岩

鱒浜（阿品字名）一帯を昔の人は、相覧場と言っていた。毛利元就が、この場所で、厳島を望見して戦略を立てたと言われている。これにより、相覧場の地名になり、「勝」が「相」に変わったのは、「相」（アイ）は海辺を意味する言葉で相覧場と名前が付けられるようになった。火立岩より毛利元就が大内義隆の委託（遺言）を受けて陶晴賢を討たんとして、精兵 3000 人を率い吉田城（高田郡）を出発して、御建山みたてやまの上に本陣を構え進めた。火立岩から、弘治元年 9 月 (1555) 晦日の夜、風雨晦日の宴に乗じて、元就ここより出船した。連勝の鼻（沖山）では、対岸厳島根に大縄をうちかけ、軍船がこの縄をつたい夜陰に乗じて櫓の声をしのばせ、一気に厳島に押し渡り奇襲攻撃を賭け勝利した。この場所は、明治 25 年 (1892) 頃までは、花見時、沖山で鴨を獲るため遊山者がすこぶる多かった。また、昭和 26 年 (1951) 第 6 回広島国民体育大会の射撃会場であった。

この海岸には、有名な岩が多くあり、蓬萊岩・隠れ岩・平氏岩・長岩・火立岩ほうらいいわがあり連絡船（漕ぎ船）の発着場として利用されていた。



火立岩



山陽鉄道が、明治 27 年 (1894) 糸崎から広島まで開通し、翌年から広島・徳山間の工事に入る。当初、駅の設置される予定は、己斐・廿日市・地御前・玖波になっていた。特に地御前は宮島厳島神社と縁とゆかりのある地として候補に上がっていたが、明治 30 年 (1897)9 月 23 日に開通式が挙行された時には、設置駅は横川・己斐・五日市・廿日市・宮島・玖波・大竹と変更になった。地御前には、耕地がないことにより、村民が反対したといわれている。山陽鉄道は、明治 39 年 (1906) に国営鉄道山陽本線に移管された。大正 13 年 (1924)11 月 30 日に五日市・廿日市間、昭和 3 年 (1928)6 月 29 日に廿日市・宮島間が複線化された。

昭和 63 年 (1988)4 月 3 日に宮内串戸駅が開設される。

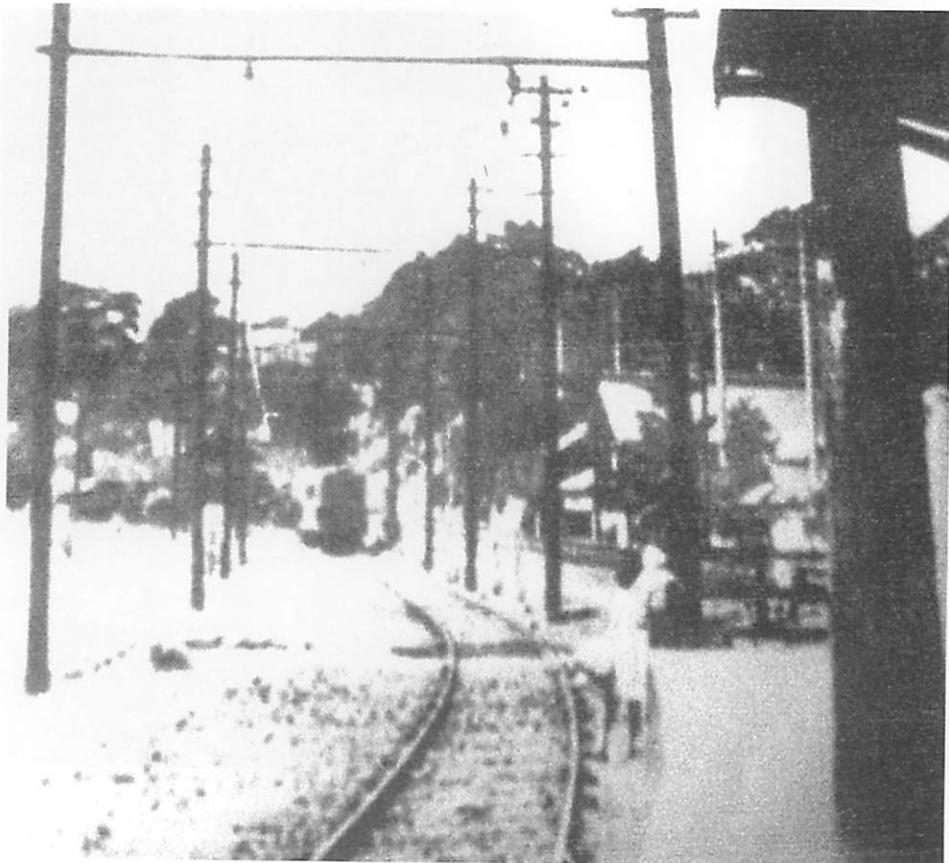


山陽鉄道

広島瓦斯電軌

電車宮島線は、宮島までの観光客を誘致するための電車を企画したもので、大正 14 年 (1925) 廿日市・地御前間、大正 15 年地御前・新宮島間 (阿品)、新宮島から宮島口まで開通したのは昭和 6 年 (1931) です。路線が宮島口まで開通されるまでは、宮島に渡る渡廻船 (連絡船) は、地御前で下車して、徒歩または、乗合自動車で新宮島栈橋行きに乗り宮島に渡航していた。当時の料金は、己斐から地御前間が 27 銭、地御前から新宮島栈橋間の乗合自動車が 9 銭、新宮島から宮島までの連絡船 15 銭。合計 51 銭であった。今日の物価に換算すると約 680 円となり割高であった。

昭和 19 年 (1944) 廿日市駅から宮島口駅間が単線になった。これは的場から皆実三丁目 (現在皆実六丁目) を複線で開通させるためであった。



広電単線

地御前海運輸送と旅客船

江戸時代、現在の観音堂から地御前農協までが地御前港であった。旧公民館は浅野藩の年貢米倉庫で、明治27年(1894)頃の港には、150石積み以上の船が4隻、100石～150石積みの船が4隻、50～100石積みの船が6隻出入りしていた。これは、甘日市港の廻船数を上回るもので、江戸時代末期から明治初期にかけては、甘日市港を上回る発展を見せていたが、明治後期には、地御前港への商船の出入りは途絶え漁船留として使用されるようになった。

旅客輸送は、江戸時代から甘日市港と地御前港には渡廻船や番船がおり、宮島や能美島と結んでいた。

明治24年(1891)頃には、地御前棧橋(阿品)から宮島への連絡船が10数隻いて、乗客運賃、1人5銭・2人8銭・3人9銭・4人10銭・5人12銭。但し、暴風・夜中は水夫(船頭)を1人増すごとに倍額になる。

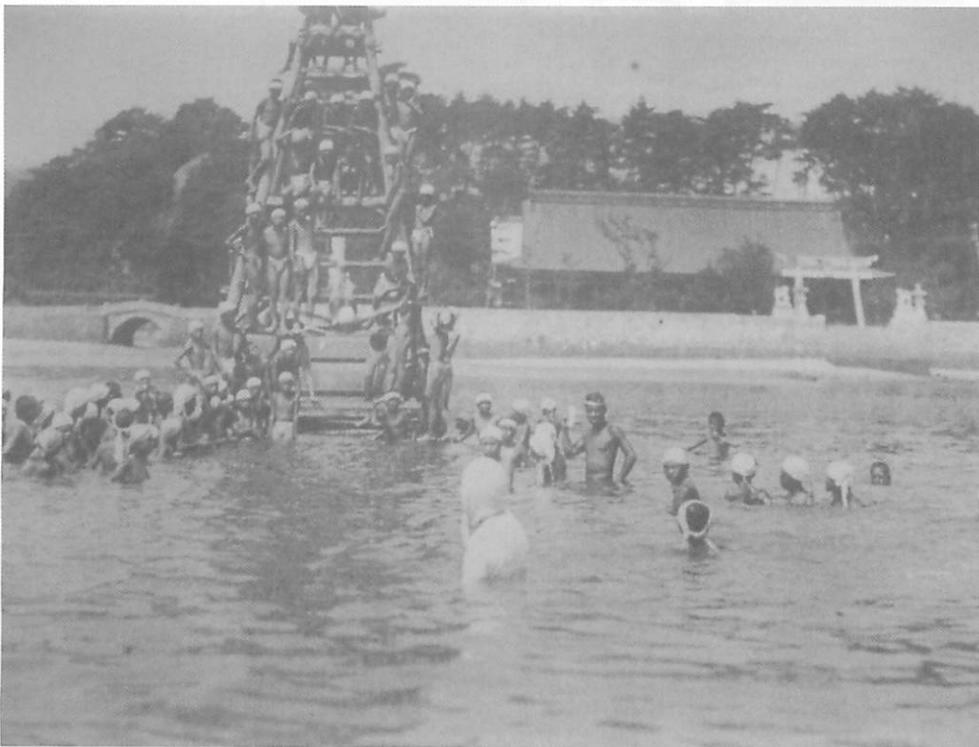


地御前海運と旅客船

明神が浜と海水浴場

地御前神社前の明神が浜は、夏場になる地御前海水浴場となり、遠浅で砂浜もきれいな海水浴場で、シーズン前になると、小学校の高学年の生徒が、砂場を掃除して海水浴場の準備をしていました。海水浴場には、貸ボート屋、飛び込み台も設置され、「地宮館」が経営する大きな栈敷と、宿泊施設や大衆浴場がありました。海水浴シーズンに入ると、広島電鉄の臨時停留所「地御前海水浴場前」に電車が止まり、広島市内や山間部から大勢の海水浴客で賑わいました。また、学校単位や子ども会の臨海学校も開かれ、小学校や地御前神社が宿泊の場となり一日中楽しめる場所でした。

地御前海岸は、干潮時には「あさり」「マテ貝」「大貝」堀で地元の人や近隣の人で埋まります。少し沖に出ると「海藻」に魚が群がり、多くの人が引網を引く風景を見ることが出来ました。



明神が浜海水浴場

地御前の港と波止場

地御前の港は観音山から現在の農協までが港で、観音山側が漁船の船着き場であった。明治27年(1894)頃まで、50石積みから150石積み以上の商船が20隻係留され、出入りは廿日市港の廻船数を上回り発展をなしていた。渡廻船や番船は、能美島や宮島を結んでいた。

文化13年(1816)には、旧公民館跡地に「浅野藩年貢米蔵」があり、頻繁に大阪通いの商船が出入りし、現農協の裏に大井戸があり、その横の胡神社の祠に船員たちが安全を祈願していた。

地御前村は、鉄道や道路での拡張に伴い、明治41年(1908)に、地御前村民の有志により、港周辺の埋め立て造築が始まった。造成後、新開地を宅地として売り出す計画で、その時期、石垣積みの波止場が出来、入り江には、雁木・焚き場があり港として十分な役割をはたしていた。



地御前の波止場

地御前の牡蠣養殖

地御前の「牡蠣」は全国的にも有名で、美味しいと評判である。広島牡蠣の養殖の歴史は古く 100 年以上の歴史がある。地域における牡蠣の養殖は、文久元年 (1861) 頃、廿日市の山代政次、三輪弥助に始まったと伝えられている。養殖は太田川の河口域に発達した平潟と河川水がもたらす栄養塩（プランクトン）によって成り立つ。牡蠣の養殖は、昔は、「地蒔き」「牡蠣ヒビ」「杭打ち式吊り下げ」方式が一般的で、昭和 9 年に吉岡力男、梶上利夫ら 20 名の青年会（漁業青年団）を結成し、新しく「やぐら式の垂下式」養殖法に取り組んだことから大きな発展をした。

牡蠣養殖は種付けから始まり、ホタテ貝の殻を種付け場に吊るして待ち、再度種牡蠣を通し換えて筏に吊るし換える。牡蠣が食卓に並ぶまでに、2 年物 3 年物と日数がかかり、衛生面においても気を使っているとのこと。そうした、品質・衛生面などが評価され、昭和 52 年第 16 回農業祭に参加し、水産部門において最も優秀であるとして、地御前漁業協同組合青年部が天皇杯を受賞した。

瀬戸内牡蠣は、東北辺りの牡蠣に比べ牡蠣殻の肉厚が薄く焼き牡蠣に適しているため牡蠣ステーションが増えてきている。



牡蠣筏

地御前の漁業

瀬戸内沿岸の地御前沖の漁場は、宮島付近を中心に東西に広がり、特に小魚の漁場として知られ村人の大半が漁業に従事していた。

昔から、網を仕掛けた小舟が櫓を操って行う漁業が盛んで、「うたせ網」「ボラ釣り」「海老網漕ぎ」「鯛網」漁など。そのうちの、鯛網漁は、漁夫を大勢雇い多くの船が港を出航する様は壮絶で、地御前では、吉岡・世田・磯辺の3軒が網元でした、漁は9月中旬から10月下旬の1か月余りが最盛期で、漁法は引網式、福山軒の浦の鯛網と同じです。網を積んだ2隻の船が最初の1番漁の場所を3軒で決め漁に出る。大漁の時は、大漁旗を掲げ丘（陸）から双眼鏡で見て釜焚きの準備が始まり、鯛の荷揚げを待つ。

鯛の茹で揚げは、広場の「むしろ」の上で干され「イリコ」となる。干されたイリコの上を、子供たちが「小イカ」や「小魚」取りに入ると、「イリコ」を踏みつぶすのでよく怒られたのである。「鯛網」漁も昭和初期までが最盛期で、漁船も大型化したうえに、機械化されて漁法も変わり漁場も荒れ、今まで栄えた地御前の「鯛網」漁も次第に姿を消し、漁師も牡蠣養殖に力を入れるようになった。

「網引き唄」 廿日市町の民謡から

♪ 宮島よいとこ朝日を受けて
弥山おろしがそよそよと
弥山鳥が新町に下りて
金も持たずに買う買おう

(新町は大正期まで游里の地名である。)



イワシ水揚げ

地御前の盆踊り

地御前の盆踊りは、歴史も古く江戸時代後期 150 年来の伝統ある踊りで、太鼓・横笛・三味線・音頭に合わせて耳繰り踊りと一般の人は言っている。手の上げ方足の運び、優雅でしなやかな踊りで、豊年踊り・供養踊り・大漁踊りとして踊られてきた踊りのことである。昭和 30 年 (1955) 頃までは、年に 2 回浜じょうと町じょうで、浜じょうは、新盆の 8 月 15 日、勝谷酒造の前で早朝より木製櫓の組み立て準備をして、夕方になると前踊りとして宮内村の天王社で踊り、20 時頃から本格的に地御前踊りが始まる。踊りの輪が広がり、音頭の唄声と太鼓に合わせて、♪踊るバカたれ、観る奴阿呆、太鼓たたきの調子もの♪と踊り子は囃子をつけて歌っていた。小路から入れ替わり立ち替わり、浴衣姿に雪駄仮想衣装で夜が明けるまで踊り続けた。

町じょうは、旧暦の 8 月 15 日、竹本米店前で、19 時頃から肌寒いなか夜中まで踊っていたのを覚えている。地御前の盆踊りは有名で、県の盆踊り大会、西条の八本松や郡の盆踊り大会にも参加していた。平成の始め頃は、廿日市の 4 月「桜まつり」9 月「豊年祭」に参加していた。最近では、伝統を継承してゆくために、地御前保育園「夕涼み会」地御前小学校「運動会」でアトラクションとして児童と一緒に披露している。また、地域の夏祭りでも地御前踊りが踊られている。



盆踊り

とんど祭り

とんど祭りは、古くから伝わる伝統行事で、昔は年の初めの1月14日に開催されていた。地域の方が前日に雑木や竹を切り、田んぼに櫓を組み立て、竹の枝に書初めを吊るすことで、字が上手になるように願う。また、古いお札や破魔矢・新年のしめ飾り・門松など積み上げ、今年の年男・年女にて点火される。点火されると炎が燃え上がり竹のはじける音で観衆の拍手喝采。炎がおさまるのを待ち、鏡餅を焼いたり、竹筒で酒を沸かしたりして無病息災をお願いする。昔は、とんどで焦げた竹を家に持ち帰り床下に置くと、火災の魔除けになるといわれたものである。古くは各地で行われていた。とんどの歴史は約150年続けられている。



とんど

秋祭り俵もみ

地御前村の秋祭りは、10月の18・19日（中の九日）と定められていた。昭和31年（1956）廿日市5か町村合併以来、第二土・日曜日が秋祭りと定められた。地御前村の秋祭りと言えば「俵もみ」。昔は、東側の浜方・西側の町方に分かれ、青年団用と子ども用各1台ずつ出して競り合った。地御前の「俵もみこし」の始まりは古く、浜の櫓は、地域の大工が製作し150年来の歴史があり、また、町の櫓は立派な彫刻入りの作りで、地御前の有名な宮大工 中谷新七氏の作で100年以上前の物と言われている。秋祭りが近づくと、櫓を米ぬかや茶殻で丁寧に磨き、米俵を組み込む（亀の甲編）など、連日の作業が待っている。本番が近くなると、足慣らしをして本番を迎え、当日、本番には地御前の氏神様大歳神社においてお祓いを受け、町に威勢のいい音頭で練り歩く姿は勇壮な限りである。最近では、担ぎ手は揃いの法被と白足袋を履いて担いでいるが、昔は、「長じゅはん」に黒帯を締めて担いでいた。音頭出しも、それぞれ足並みに合わせて、自作の詩と節回しで、周りの観衆を楽しませてくれた。



俵もみ

出発担ぎ出す前の木遣り一声（一般的な文句）

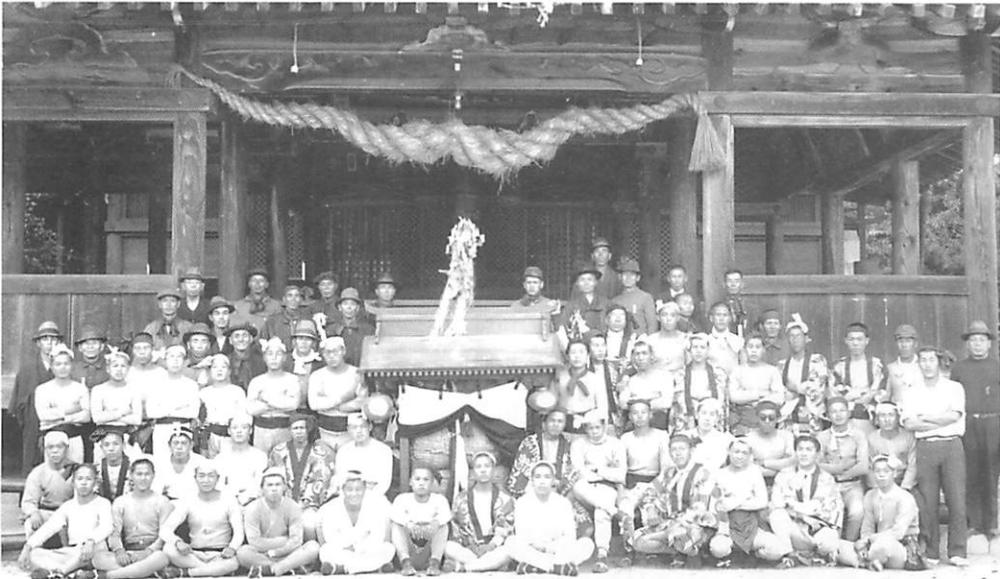
♪ ヤーレ かかれどっと一度にや コンヤレシヨ
声さえあればしたもんじゃ いいどとなればごめんやで
長口上は道のさまたげ、サア若い衆さん上げてくだされ

流し歌

♪ 揃うた、揃うた若い衆が揃うた稲の出穂よりや
またも良く揃うた

ご祝儀の返し木遣り

♪ ヤーレ 又もしよもかや ありがたや花の御礼申しませう
地御前の「俵もみ」は、昭和51年(1976)5月3日 第2回花の
祭典フラワーフェスティバルに出場



俵もみ(その昔)

勝谷酒場

地御前の町屋が軒を並べる通りに、明治20年(1887)代に、勝谷酒造を、勝谷孫七・孫一親子で酒造りを操業する。

大正7年(1918)に孫七の子、勝谷柳吉氏が八幡製鉄に勤務していたのが縁で、福岡県八幡市へ支店を出す。昭和20年(1945)に、太平洋戦争の空襲に遭い爆弾で、店舗・母屋を焼き閉店する。

昭和28年(1953)10月に勝谷廉氏が株式会社組織にする。

勝谷酒造の銘柄と由来

- 勝の井 勝谷酒造の「勝」と酒造場に在った名水の井戸の「井」から名前を付ける。
 - 宮島正宗 対岸の宮島から名前を付ける。(みや正宗)
 - 活 力 柳吉氏がドイツへ国費留学したときのドイツのビールの銘柄から名づける
- 昭和63年(1988)10月酒の酒造を止める。



勝谷酒場



ハワイ移民

広島県で最初の移民は、明治 18 年 2 月で、ハワイへの官約移民 28 人が渡航したことに始まる、とされている。官約移民とは、日本とハワイ王国との間に、明治 17 年に締結された「日布渡航条約」および「日本人移民ハワイ渡航約定書」に基づいて、明治 18 年 2 月から 27 年 6 月までの期間に 26 回にわたって、日本政府の取り扱いによって、労働を目的にハワイに渡航した契約移民をいうものである。明治 27 年に政府取り扱いの移民業務が民間業者に委託されることになり、その後の移民を、「私的移民」というようになった。広島県では地御前村・平良村・宮内村・原村・廿日市町で構成され、地御前村は、移民圏内のうちでも多く、その内訳は、男性 222 人・女性 75 人で、広島県内で最も多いのは、仁保村 2 番目が地御前村であった。1 カ月の給金は 15 円で、病気をせずに勤勉に働けば 3 年間で 400 円の貯金が可能だ、と記されている。当時、内地(日本)では農業奉公人の給金が食事付きで年 10 円程度であった。

なお、明治 24 年末に広島県が行っていた調査では、ハワイ在住の広島県移民者の 75% が送金しており、その額は 27 万円にも達していた。これは同年の県予算の 54% に相当する額であった。送金は主に広島市内の住友銀行や三井銀行など大銀行の支店に振り込まれていたが、これに着眼して村上銀行設立となる。

以前の木造 地御前小学校は、ハワイ移民者の寄付によって建設されたものであり、生存最後の方が 15 年程度前に亡くなられ、一つの時代の区切りとなった。



J A 広島総合病院の歴史

昭和 21 年 6 月佐伯郡内の町村長および町村農業会長の代表の方々が県農業会を訪れ、廿日市方面の緊急対策として原子爆弾による負傷者に対する医療施設の設置をするよう強い働きかけがあった。そのため佐伯郡 37 カ町村および農業会が出資して地御前村元旭兵器（株）の工員宿舎を買収し農業会病院の誘致を決定する。

昭和 22 年 12 月 23 日、四診療科、スタッフ総員 20 名、60 床の病床を有する農業会佐伯病院として開設された。その後、昭和 37 年と 40 年に相次いで増床と診療体制の充実を図り、昭和 41 年には総合病院の認可を受け、名称も佐伯総合病院と改称された。

爾来、同地域は広島市のベッドタウンとして開発が進み、診療圏人口の増加に伴って施設の狭隘化を来したため、昭和 54 年には大幅な増改築が行われ、これを機会に名称も現在の広島県厚生農業協同組合連合会 広島総合病院と改められた。その後更なる人口増加に伴う医療需要の増大により地域の中核的病院の性格を持つに至り、昭和 55 年には二次救急病院の指定を受け、また昭和 59 年および平成元年には増築増床工事が実施され 430 床となる。

更に平成 9 年 5 月には、施設の狭隘化と老朽化に対する対策として新棟建設と既存棟の改築工事が開始され、平成 10 年 10 月末に新棟完成、平成 12 年 2 月には全工事が完了し、同年 4 月より 578 床となる。その後透析用ベッドへの転用により平成 15 年に 570 床、外来化学療法用ベッドに転用により平成 20 年に 561 床となる。

広島西二次保健医療圏の三次救急患者への速やかな高度医療の提供と、広島都市圏域全体の救急医療体制の充実強化のため、平成 22 年 8 月から平成 23 年 2 月にかけて救急棟新築工事が行われ、平成 23 年 4 月には地域救命救急センター 19 床を開設し現在に至っている。

（平成 26 年 4 月 1 日現在）

- 名称 広島県厚生農業協同組合連合会 広島総合病院
- 許可病床数 561床
- 診療科目 計40診療科目
- 指定等
 - ・地域医療支援病院 平成16年8月12日
 - ・地域がん診療連携拠点病院 平成18年8月24日
 - ・DPC 対象病院 平成21年4月 1日
 - ・地域救命救急センター 平成23年4月 1日
 - ・へき地医療拠点病院 平成23年9月 6日



総合病院の前進



戦前昭和 18 年 (1943) 頃、地御前に結核病院が建設される噂が流れ、地御前住民から反対の声が上がった。地御前村は漁師が多く、衛生面から汚物の流失問題で漁業者の反対が強かった。衛生面の約束と地御前住民の療養診療が出来、入院病棟…床を確保できる約束で、地御前村役場と協定確約書が結ばれた。よって、昭和 28 年 (1953) 6 月地御前通信病院が開設される。主として肺結核診療で、診療科目は、内科・外科医療を設置、病床数 60 床。

地御前村から宮内村へ通じる、字野坂見譲寺に建設される。開設 1 年前、野坂道拡幅工事の時、野坂遺跡が発掘される。病院建設前に病院の敷地の山を開拓した際、貝塚 (アサリ) を主体にした物も発掘される。病院の周りには、殆ど住宅もなく田園の広がる閑静な地で、夏には、小さな小川 (小調子川) に蜚が乱舞する場所であった。

昭和 31 年 (1956) 4 月に第 2 病棟と診療棟が増設される。病床数は 164 床。また、10 月に病床数 184 床に増床される。

昭和 35 年 4 月通信病院の下手砂畠の地にグラウンド (4,901 m²) を設置。グラウンドは地域の住民も借用でき、野球やソフトボールなどが出来る広さで多くの人が活用されていた。

* 昭和 37 年病床数 164 床に減らし、そのうち、一般病床 28 床・結核病床 136 床。

* 昭和 40 年病床数 123 床。一般病床 43 床・結核病床 80 床。

* 昭和 54 年 4 月成人病多項目健診を開始。

* 昭和 60 年地御前通信病院が廃止される。

32 年間の通信病院開業で、地元地御前から多くの方々が従事、職務に携わってこられた。広島市内に勤務が変わり大半の方が勤めを辞められた。

昭和 60 年 (1985) 4 月三大公社、日本国有鉄道 (国鉄)・日本専売公社・日本電信電話公社が民営化になり、名称も国鉄は〈J R〉・専売公社は〈J T〉・

日本電信電話公社は〈N T T〉に変わる。

地御前逡信病院の跡地は、平成 2 年 4 月野坂中学校が開校される。また、野坂中学校の裏、野坂公園予定地では、長寿会の方々のゲートボールの練習場や、散歩・ランニングコースになった。郷土文化保存会も、サッカー場が出来るまで、とんど祭りの場所として使用していた。



逡信病院



昭和 14 年 (1939)7 月 12 日、「鉄道幹線調査会」が勅令をもって設立され、昭和 15 年 9 月に鉄道省が「東京・下関間新幹線建設基準」を制定し、同年に帝国議会で「広軌幹線鉄道計画」が承認され、国家が昭和 29 年 (1954) までに開通させることを目標に、用地買収工事が開始されることになる。丸子山の左側から右側に至って、中央部の木が伐採されていて、あの辺りを弾丸列車が通るらしい、噂では弾丸列車が通る近くの家は窓ガラスが割れるらしいと話していた。その後、ネットで検索すると、戦後元の土地所有者から「国鉄に売却した土地が使用される見込みがないのなら返還すべし」という内容の訴訟が起こされた。これは、最高裁までゆき、国鉄の敗訴がほぼ確実となった。東海道区間については、東海道新幹線の建設が訴訟中に決定したため返還しないことになったが、山陽区間については、山陽新幹線の計画が具体化されていなかったため、山陽新幹線の建設が決定した際は、返還した土地を再び買収するわけにはいかないのです、多くのルートが変更されることになったという。現、新幹線でトンネルが多くなった要因には、このような背景があったとされる。

若宮 悟 氏 談



廿日市の海岸線は、それぞれの時代の人々の努力により河川流域での新開開発によって次第に沖へと延びていき、その姿を変えていった。

江戸時代の前・中期、地域では佐方川・可愛川・御手洗川流域を中心に、およそ 30 カ所にのぼる新開が築調されている。しかしそのほとんどが 1 町歩以下の小規模なものであった。それはこの時期の新開の築調が、主として河川が河口に形成する堆積土、三角州を利用して行われたものであってみれば、大きな河川が流れていない市域で小規模な新開が中心になるのはむしろ当然のことであった。開発の目的は当時商品作物として発展しつつあった綿作の耕地として、新開が築調されていった。

扇新開は、文化 12 年 (1815) に地御前村で立案され、翌 13 年 8 月から工事が始まり 9 月 8 日に潮止め工事が完了した。この造成には、地御前村民や雇い夫など 619 人の他に五日市・大野など 16 カ村から 284 人の加勢夫が参加した。名称はその形状が扇形であることから名づけられた。

住吉新開は、弘化 3 年 (1846) から嘉永新開は嘉永 2 年 (1849) から、桜尾新開は文久 2 年 (1862) とともに明治 2 年 (1869) とともに言われ、それぞれ工事が始まった。

戦後、新開地 (扇新開) に塩田場を作って塩採取に取り組んだが、間もなく廃止となり、空き地広場は青年会や子供たちの草野球場になった。野球練習中、かの有名なアメリカ大リーグニューヨーク・ヤンキースの野球選手ジョーデマジオと、映画俳優マリリンモンローが、新婚旅行で日本を訪問中 (1954)、岩国の米軍基地を慰問で訪れる際、地御前の塩田跡地 (草野球場) に面した道路 (2 号線) を通りかかったところ、地御前の青年や子供たちが野球に興じているのを見て、デマジオとモンローが車から降り、草野球場の輪に入った? という話がある。



「野坂」地名の由来

戦国時代の天文 10 年、鎌倉時代以来の伝統を誇った巖島藤原神主家が滅ぼされた後、実質的に社家の支配的地位を確立したのは、棚守職にあった野坂房頭ふさあきでした。この家系は鎌倉時代末の嘉元 2 年 (1304) の長兵衛尉光久ちようひょうえのじようみつひさにまで遡ることが出来ますが、これによると「長」と称しています。房頭は「野坂」を称し、以降、野坂が続きますが、長から野坂への苗字の改変は房頭より前にも二度あり、野坂家は棚守職を世襲する嫡流ちやくりゆうの長家しよりゆうに対して庶流の間柄であり、嫡流長家の事情から庶流に棚守職が移ったものと推定されています。

いずれにしても巖島神社は古来祭祀には異姓の他人を交えず、佐伯氏の族長があたる規範があるにもかかわらず、承久しやうきゆうの乱後、藤原親実ちか親実に神主職が与えられ、以後、世襲は行われてこなかったわけですから房頭が神社支配の実権を握ったことは承久以前の古制にかえったとも言えることです。即ち、この棚守家は「長」といい「野坂」と称しますが、元来、佐伯氏なのです。この神社関係者たちは在島以前は地方に住んでおり、社人の修理検校けんぎょうであった佐伯親重ちか親重の家屋敷が下平良河井(可愛)にあったという元亨 4 年 (1324) の記録があり、房頭の「野坂」の姓も応永おうえい 13 年 (1406) まで住んでいた地御前の小字野坂によると言われます。

広報はつかいち NO555 昭和 62 年 6 月 15 日発行 参照



「阿品」地名の由来

阿品の本谷の奥の辺りに、「岩神」さんがいます。昭和 26 年の台風で社殿が倒れ、今はその附近の山に移されていますが、この神社の祭神については「田心姫命」（芸藩通誌）、又は「足那稚^{あしなち}」（広島県史）としているが、田心姫命は巖島神社に付会したものであり、「足那稚^{あしなち}」が古く正当である。昔「高天ヶ原」から出雲に来られ「ヤマタノオロチ」を退治された「スサノオノミコト」の伝説はよく聞きますが、その時の姫（クシナダヒメ）の父親にあたる方で、土着の神とされていますが、その名前から「アジナ」になったというもの。

「アジナ」は葦でなでるという意味で、葦の生えていた所というもの。

昔弘法大師が、諸国を廻られた時、ここに来られ水を飲まれたところ、「味のない水だのう」と言われたので「アジナ」となったという。

以上、三つの説が、土地の人々に語り継がれています。

岩鏡神社

古くは、岩神社 又 磐神社と称し、阿品の祖神として阿品川の上流の岩山に磐境を拝する地に拝殿があり祀られていました。阿品の氏神さんである祭神は、一説によれば「足名椎」(アシナツチ) ^{あしなつち} 足那槌尊で農業で福をもたらす神で、土地の人に岩神さんと呼ばれている。一説によれば、足名椎は、八岐大蛇退治で知られた寄稲田姫 (クシナダヒメ) の父親で農業の神様です。

昭和 26 年 (1951) の台風により、本殿・幣殿・拝殿と境内の一部も流失し河川改修用地となったが、昭和 28 年氏子により現在の地 (阿品 2 丁目 18-8) を無償提供していただき、本殿社流造り、棧瓦葺と付属社殿・幣殿・拝殿が復興移設建設される。

現在の、岩鏡神社に祭られている祭神は、^{てなづちのみこと} 手摩乳命・^{あしなづちのみこと} 足摩乳命の二柱が祀られている。

下の神社は、昭和 57 年増改築以前の岩鏡神社



岩鏡社



阿品の谷尻から山越えをして、大野村更地をへて西国街道に合流する場所に在った「教え地蔵」は、旅人の安全を見守っておられたお地蔵さん。この谷間奥におられたお地蔵さんは、廿日市ニュータウンの造成工事が始まる昭和 40 年頃までは、阿品調整地の山側付近の山中にあったが昭和 54 年地元の有志の手で現在地に移設された。

西国街道は廿日市・宮内槍だしをへて大野に向かっていたが、旅人や村民は近道として、廿日市から地御前を経て阿品の海岸を抜け谷尻を通り、中山と更地へ分かれて山を越え、西国街道に通じる村道を行き来する人も多かった。

このお地蔵さんは、谷尻の分かれ道に安置され、教え地蔵さんの由来は、山道を辿る旅人が迷わないように、地御前や中山、更地への道を教え旅の安全を守ったと伝えられ、地元の人々からは、今も「教え地蔵さん」と親しみを込めて呼ばれている。



教え地蔵

五輪の塔（供養塔）

弘治元年（1555）毛利元就が厳島の戦いで、陶晴賢率いる 2 万人の大軍とあい交え全滅させた「厳島合戦」があり、毛利の軍勢は対岸の島の陶軍を攻めるために、阿品に兵力を集中させ厳島に上陸を企てました。田尻の「いたみがくぼ」に陣屋を置き、阿品の農民たちに、対岸の島、宮島大元まで届くわら縄を作らせたそうです。この縄を深夜たぐりながら、宮島に上陸を企て、毛利軍と陶軍の戦いが行われた。

その時多くの兵士が討ち死にをし、死体が潮流によって、阿品の海岸に流れ着きました。現在阿品陸橋が掛かっている橋の山は「じんねいの端（鼻）」といわれ、阿品市民センターの裏辺りは海で、明治 10 年頃までは、大洲といわれていた。この山伝いに旅のお坊さんが通りかかり、現在五輪の塔の場所に、藁屋根のお寺を建て、多くの討ち死に兵を葬ったということで、今でもこの山を寺山と呼ばれています。阿品地区には、山裾に当時の墓五輪塔が多く残されていましたが、農民が田畑を作るために殆ど埋めてしまいました。



五輪の塔

お上がり場

明治 18 年 (1885) 7 月 31 日、明治天皇が広島に行幸、宮島に渡航され、厳島神社に御参拝後、大聖院にご宿泊される。翌日、8 月 1 日宮島から阿品の「お上がり場」にご到着上陸されて、廿日市と草津でご休憩され、広島 of 階行社 (浅野藩) にお宿をとられる。

行幸記念として、お上がり場に、浅野長勲侯の書による「西幸記念」の石碑を建立。



お上がり場



明治3年(1870)2月20日地御前村に生誕する。本名 小林花吉。明治28年(1895)若くして、太平洋を渡りハワイ移民たちと同様にハワイに降り立った。当時、28歳でハワイに画塾を開き、ドール大統領・プリンセス カイウラニ・ハワイ銀行頭取の肖像画を描いた時のサインは、Banko「万古」。万古の画号は、25歳から35歳までで日本に帰国して35歳の時、第10回白馬展で油彩を出展した時、画号を「小林千古」に改名。当時の先輩の画匠に万古として使われていたため「千古」にした。

明治24年(1891)カリフォルニア大学に入学 21歳

明治29年(1896)内地展覧会において、クラウン金杯賞受賞 26才

明治30年代に、アメリカで学び、さらにヨーロッパにおいて黒田清輝・岡田三郎助に知己を得て、帰国後白馬会に所属して日本画壇において鮮烈なデビューをする。



小林千古誕生の地

明治37年(1904)34歳の時、病のためヨーロッパより帰国後、明治44年41歳の若さで病没する。お墓は、金剛寺旧墓地。

小林千古の3大画作は、1.ミルク・メイト 2.パッション 3.誘惑
パッションは、明治34年(1901)31歳の作

小林千古案内板 平成22年2月生誕の地に設置。



土木技師の父が朝鮮総督府に勤務していたため、朝鮮の京城で生まれる。敗戦後引き揚げ、両親の故郷である佐伯郡地御前村で育つ。子供の頃から作家志望で、小学三年頃には冒険小説を書いていた。広島二中を経て広島高等師範学校国語科に入学。在学中に同人誌「天邪鬼」を創刊しジャーナリストのスタートをきる。

昭和31年(1956)雑誌新潮に「合わぬ貝」を連載しトップ屋になる。昭和36年病氣(結核)になり、これを機にトップ屋を辞め本格的に小説の執筆活動にはいる。翌昭和37年(1962)「黒の試走車」が大ヒットに、流行作家として多忙を極めながらも、「梶山季之」には若き日からどうしても書き残したいテーマがあった。

生まれ育った「朝鮮」、引き揚げて来た両親の故郷広島「原爆」、母親が移民の子として生まれた「ハワイ」、この3つを結び、民族の血と平和を描く壮大な“環太平洋小説”を構想し、20数年をかけてノート12,000冊近い資料を収集していたという。タイトルは「積乱雲」、総枚数8,000枚にもなる大作を書き始めた矢先の死であった。

昭和50年(1975)5月11日長編小説「積乱雲」取材の為、訪れていた香港のホテルで肝硬変にて45歳の若さで死亡。



“移民者の送金受け入れで発展” ふるさと銀行物語より

村上銀行は、佐伯郡内でも屈指の地主である村上隆太郎の全額出資による個人銀行として設立されたものである。当初の状況は次の通りであった。

| | |
|-------|---------------|
| 設立年月日 | 明治31年4月15日 |
| 営業開始日 | 明治31年6月1日 |
| 本店所在地 | 佐伯郡地御前村8番地2番邸 |
| 資本金 | 3万円 |
| 行主 | 村上隆太郎 |

佐伯郡内には既に、明治30年6月に佐伯貯蓄銀行と大竹貯蓄銀行が設立されており、郡内での銀行競合は厳しくなることが予想されたが、村上家が敢えて銀行設立に踏み切ったのは、佐伯貯蓄、大竹貯蓄とは一味違った取り扱いを行う銀行を目指したことにある。それは、地元民の金を預貯金してもらうことはもちろんであったが、それ以外に地御前村やその周辺から海外へ移民して行った者が、郷里への送金を村上銀行が受け入れる主銀行となる、という狙いがあった。村上銀行が設立された頃、海外からの送金は主に広島市内の住友銀行や三井銀行などの大銀行の支店に振り込まれていたが、この送金資金を村上銀行が吸収して、郡内で活用できる金融機関であることを願ってのものであった。当時貯蓄銀行では送金などの取り扱いは直接的にはできなかったのである。

広島県は明治以降、ハワイ、アメリカなどへの移住者が多い県として有名であるが実際の数字からみても、昭和35年にホノルル総領事館が調べた「日系一世の出身都道府県別人口」によると、広島県が一位で4715人で24.1%とほぼ4分の1を占めており、次が山口県の3918人、沖縄県の2873人となっている。

村上銀行は、開業当初の明治31年末の貯金は1万5千円余りにすぎなかったが、村上隆太郎一族の信用もあって、34年末には10万8千円余となり、さ

らに 39 年末には 37 万 5 千円に達している。このうち海外送金の割合が如何ほどであったかは判明していないが、ある程度の割合となっていることは想像できよう。一方、貸出金も 31 年末の 5 万 9 千円余りが、39 年末には 39 万円となった。貸出先は主に牡蠣の養殖業者へ向けられている。この 9 年間に資本金は 10 万円に増額しており、店舗も 33 年に五海市村（現佐伯区）に五海市支店を、34 年には平良村（現廿日市市）に可愛出張店を開設して、郡内の取引先の拡大を図った。

明治 40 年 2 月、村上銀行は業務の伸長拡大に伴い、個人銀行での限界を感じるようになり、資本金を 17 万円増資して「合名会社村上銀行」への組織の変更を行った。代表社員には村上隆太郎が就任したほか、社員 5 名はいずれも村上一族で、全員無限責任社員となった。45 年には 5 千円増資して 17 万 5 千円とし、社員も 2 名増している。（村上隆太郎・村上信太郎・村上定一・村上勉吉・村上義一・村上仁二・村上国吉）

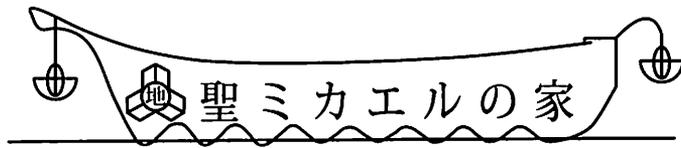
合名会社への組織変更を機に、本店を地御前村から佐伯郡平良村下平良に新築して移転した。地御前村の本店跡は地御前出張店としたほか、新たに佐伯郡大野村にも大野出張店を開設している。そのほか店舗を新設して 9 カ店とし、佐伯郡沿岸部への店舗網を広げたのである。（五日市・能美島・大柿・大竹・巖島等）

合名会社組織となって以降の村上銀行は、外国為替専門の横浜正金銀行（後の東京銀行、現三菱東京 UFJ 銀行）とコルレス契約を結び、より積極的に海外移住者の送金を取り扱うこととした。この成果もあって、同行の業績は順調に進展して大正 2 年 12 月期には、貯金 82 万 9 千円、貸出金 75 万 5 千円、有価証券は 11 万 3 千円となった。

大正 2 年 6 月期までは順調であったが、同年 12 月同じ佐伯郡に本店を置いて営業をしていた銀行が突如預金の取り付けに遭い、その影響は広島市や近郊の銀行に及んで休業する銀行が続出し、広島市とその周辺は空前の金融恐慌となった。同行もその余波を浴びて預金の取り付けに遭遇し、さらに翌 3 年末にも、

山口県の福松銀行が休業したことから、同行と取引のあった村上銀行は流言蜚語が原因で再び取り付けに遭って、資金繰りが極度に悪化することとなった。このようなことから頭取の村上隆太郎は、今後は小銀行では経営が立ち行かなくなると判断し、大正 5 年 8 月、銀行の廃業を決意したのである。

幸いに、日本銀行広島支店長 渡辺文一郎の斡旋で、広島市に本店を置く広島銀行への受け入れが決まり、債権債務と店舗の一切を同行に譲渡して、村上銀行は同年 9 月末を以って解散したのである。なお銀行の営業権は熊本県の毛利昌平・ハツの両名に買い取られ、6 年 1 月に合名会社毛利銀行と改称して熊本県玉名郡高瀬町大字高瀬 45 番地に移転し、資本金 10 万円で営業を行うことになったが、昭和 3 年には安田銀行（後の富士銀行、現みずほ銀行）に吸収されて姿を消している。



福祉ひとすじに生きる

「聖ミカエルの家」 村上百合子

昭和60年2月 村上百合子様寄稿（口述編集）

前半を割愛させていただいております。

昭和27年頃に廿日市の教会が出来て、私は付属の聖マリア園の園長をすることになりました。

その頃岩国基地へ通っておられた神父様がいらっしゃいました。後輩の長井神父様が、あまり日本語がお出来にならないので、村上家で勉強会を開いて下さっていました。

当時教会の二階に、問題のある青年たちをお預かりしておられたのですが、広い家を探していると聞いて村上家を提供することに致しました。

昭和28年7月に長井神父様と、少年刑務所出身の18歳から20歳位の青年達18名が村上家で生活することになりました。

戸口には「聖ミカエルの家」と書いた看板を掲げました。聖ミカエルとは悪魔から私達を守って下さる天使の名前でございます。

その頃、青年たちは応接間で休ませておりました。

しかし床の間の軸や、香炉等を持ち出したり、幻灯機を盗んだりし、そのうちに聖堂の品まで持ち出すようになりました。

生活費なども踏み倒されたり致しましたが、その中で一番情けなく思ったことは、薪小屋に放火された時のことでございます。

幸いにご近所の方々や、消防隊のお蔭で新しい鶏小屋と大蔵の外壁を焼いただけで、大事に至らずにすみましたが、御聖堂や、神父様の書物などもありますので心配でございました。

その後個人の力も限界を感じておりましたし、ご近所の事も考え、裁判所長官であった近藤倫二氏の勧告などもあり、青年達を預かることは止めてしまい

ました。人にはどうすることもできない持ち前というものもある様に思いますが、なかには母の愛で立派に立ち直った子もおります。

私はまだ家のことで手が抜けなくて、充分なお手伝いもできませんでしたが、会計の事と、就職の世話をできるだけやって参りました。

その間に信者であるお婆さん達三人のお世話もしておりました。

昭和 33 年には里親申請が受理されて、児童相談所から送られてくる子どもの、里親として子どもたちを育てることに致しました。

人は神の恵みによって生まれたのです。愛情をもって育てるならば、必ず変わっていくと思いました。

しかしそれぞれに問題をかかえたこども達で、苦勞の連続でございました。

嘘をつく、万引きをする、おねしょをする、給食費や納入金を使うなど、素直でない子にお手伝いの方もお困りでした。

信者の方々でずいぶん沢山の方がお手伝いをして下さいました。津野、南本、佐々木、浦部、江見、長門の皆さんには、とても感謝しております。

自分の過ちを素直に認めるようになり、規則正しく登校してそのうちに学力も向上して、上級学級へ進学する子が出たり致しました。報われた喜びの一つでもございます。

預かった子どもは 16 名になります。その内の 3 名は改心の状態が見えず、とうとう教護院に引き取ってもらいました。

この様な非行少年達の姿を通して考えましたことは、やはり子どもの頃に親元を離れて、あちこちを転々として手に職もなく、下積みの生活で満たされることもなく、その内にやけになって職を失い果ては泥棒をすることになって、少年刑務所へと送られるのだと思います。

国家は罪を犯した少年達に、沢山の経費を払っているのです。国家の損失だと思うのでございます。それならば恵まれない子どもを、小さい内に引き取って愛情をもって育てて、将来独立できるような専門職を、身につけさせてやりたいと思ったのでございます。

子ども達には人の手助けが必要なのではないか、これからは子ども達を育てることを生きがいとしたいと思いました。

子ども達も次々に成長して、その後は里親の委託もなくなりましたので、昭和 44 年からは病院で産まれた引き取り手のない赤ん坊を預かることに致しました。

赤ん坊には先ずミルクを与えることから始まり、なかなか大変でございました。

この時の 6 名の子ども達が、今も一緒に生活している高校生 1 名、中学生 4 名、小学生 1 名なのでございます。

私の息子達は自分の血の近い人に、愛を感じるのが自然ではないかと申します。

でも恵まれた者だけが良くなるということは、間違っていると思うのでございます。恵まれた者だけが集まり、財閥という言葉で特別扱いされることも、好ましい事ではございません。

恵まれない人達が社会的混乱を起こす要因を作ることになるのではないかと思っております。

子ども達の身の周りの物や、衣服等のご近所の婦人部の方が手弁当で御世話して下さいますので、随分と助かっております。

生活費用は措置費の支給や、児童手当、又長井神父様のご助力により、昭和 35 年フランスの児童福祉本部からの寄付を戴けるようお願いして下さい、随分と助かりました。

その外篤志家の寄付等もございましたが、不足分は私財を売ったりしてそれに当てました。食費は国の基準でいきますと、一日 700 円でございます。私は 600 円で工夫をして栄養バランスを考えて、合理的にやって参りました。そのせいでしょうか子ども達に 1 本の虫歯もないということが、私の自慢でございます。

私も自分の被服の新調は一切しない様にしております。子ども達も現在の状

況をよく理解してくれています。

子ども達の名前は親に付けてもらっておりますが、戸籍については一切タッチしない方針で、就職するまでお世話しようと思っております。

現在の私は子ども達の面倒を見ながら、月に一度広島矯正管区教誨師と、篤志面接委員として八本松少年院、木船少女苑、吉島刑務所、吉島鑑別所へ通って長井神父様のお手伝いをしております。

私がこれまでやって来られたのは、すべて先祖の協力があったればこそ出来たのだと、本当に感謝の気持ちで一杯でございます。

今後出来ますならば、働く人達の老人ホームを造りたいと考えております。その時にはこの家を壊して、村上家の古い鴨居や立派な柱を使って造ることが出来たらいいのにと願っております。

と、村上さんは今迄胸の奥に温めていた大事なものを、そっと漏らしたという感じで、希望にあふれた笑顔で首をちょっと傾げて語られた。

村上百合子様 プロフィール

- 明治 43 年 (1910) 四国の多度津にて佐村益雄氏の長女として出生
- 三才より東京四ツ谷、中野に在住
- 東京女子高等師範卒業
- 昭和 6 年村上勝三氏と結婚
- 昭和 11 年洗礼 洗礼名マリア・モニカ / ベロニカ
- 昭和 61 年 (1986) 勲五等瑞宝章受章



聖ミカエルの家



野球応援歌（宮島さん）

歌詞

宮島さんの神主が

おもくじ抽（ひ）いて申すよう「申すには」

何時も地御前が

勝 urchi、 勝 urchi、 勝ち、勝ち

勝った方がエーヨ 勝った方がエーヨ

この歌は三段階の紆余屈折を経て明治 44 年の夏以前に地御前村内で成立したもので、昭和 4 年に成立した所謂「地御前村歌」と共に地御前村民の心意気を表明したものである。

明治 44 年、当時広島商業 2 年生だった吉岡省三さんが作ったとされている。しかし明治時代の卒業証書台帳には名前が記されているが、その後の消息はさだかでない。

地御前の野球は明治 30 年頃、ハワイ移民が伝えて始まった。マスクは村の鍛冶屋が大きな針金で作られ、野球場は鉄道施設で上田尻に出来た空き地を利用し、組は旧来の慣行で町と浜の二組に分かれていた。

次は歌詞である。古来の対抗意識をむき出しに、「町（又は浜）勝て、町勝て、勝った方がえ〜（良い）ぞ」と応援した。これが歌句の末尾の部分となった。

次いで、先進野球団の強みで、対外戦に常勝したので「何時も地御前が勝ち、勝ち、勝ち」と云う部分が附加された。又日露戦争の戦勝祈願と杓子で飯（召）取るとの縁起関係で「宮島さんの神主が云々」と云う文句が上に附加されて、この奇抜な応援歌が村内で完成した。

次は奇抜な応援体勢である。これは明治 44 年 (1911) 夏に地御前郷友クラブと廿日市篠尾倶楽部とが廿日市小学校の高須グラウンドで対抗試合を挙げた時に初めて披露された。村内に有る限りの大太鼓を担ぎこみ、10 名のラッパ隊、

村社の祭礼用である天狗の服装で乗込む者、大杓子の持込みなど、その異様さは人目を驚倒さすに充分であった。しかし、肝心の野球は県師の本式の投手を村青年として起用したが、足の負傷で敗けた由。

ところが、この地御前の応援歌並びに応援服装は、同年秋か翌年には、広島で県中と広島商業の恒例の対抗野球戦に、両校の応援団が其儘に持込み、大混乱を生じた。結局、両校へ通学していた地御前出身者同士の話合いで、以後、県商だけが借用することに決定した由である。

広島商業は大正5年(1916)8月の全国中等野球第二回大会で、地御前村の応援歌並びに応援方式(杓子)を天下に披露している。以上の次第で、召取り杓子だけは、今日でも野球戦に名残を留めている。

最近では、カープ応援でも歌われご存知の方も多くなりました。



NHK “あなたの声リポーター” 山口英美恵リポーターのブログ引用。

渡辺通氏 談

地 御 前 村 歌

作 詞 吉本 管太郎
作 曲 吉沢 実



地 球 - の う - え を い え と み て



ば ん り の は と う を も の と せ ず



か い が い と お - く わ た り ゆ き



ゆ う ひ に な あ る は わ が む ら ぞ

地 御 前 村 歌

一 地球の上を家と見て

ばんり 萬里の波濤を物とせず

かいがいとほ 海外遠く渡りゆき

ゆうひ な 雄飛に名あるは我が村ぞ

三 前に榮ある歴史をば

つぎて光をいや増すは

後に生れし我々の

肩に懸れる任務なり

二 御國のためなり家のため

からだ てつ 体を鐵と鍛ひあげ

ひやくせつみとう 百折不撓の意氣を練り

ひたい あせ 額に汗していそしまん

四 村人共同一致して

とも こころ 共に精神を火立岩

そらあじこころも 相愛心に燃えたちて

むら さかあ はか 村の榮を圖らなん

作 詞 吉本 管太郎
作 曲 吉沢 実

地御前ものがたり

平成 27 年 11 月 3 日 初版
平成 28 年 5 月 31 日 2版

編 集 地御前郷土文化保存事業

発 行 者 地御前地区自治会
(地御前市民センター内)
〒738-0042 廿日市市地御前三丁目 10-5
T E L : 0829-36-2360

協 賛 地御前地区自治会 文化事業部
地御前地区自治会 町連事業部

印刷・製本 株式会社 フジワラ
〒738-0014 廿日市市住吉二丁目 14-14
T E L : 0829-32-8778

